素秋（同）

師の曰。素秋の事、せぬ方先よろし。するに習ひなし。時によるべし。

花に芳野（同）

師の曰。花に芳野付けぬ事は、しゐ(一)て事もなし。只法度のみなり。

通るといふ事（同）

師の曰。俳諧は教てならざる處あり。よく通るにあり。或人の俳諧は曾て通ぜず。只物をかぞへて覺るやうにして、通るものなしとなり。

詞の作（同）

師の曰。或人の句は艶をいはんとするに依て句艶にあらず。艶は艶いふにあらず。又或人の句はしをりなし。しをらんずるが故にしをりなし。又或人の句は作に過ぎて心の直をうしなふなり。心の作はよし。詞の作好むべからずとなり。

はなるゝ事（同）

又曰。格は句よりはなるゝなり。はなるゝに習ひなし。蔦に蔦を付、隱士の打越に隱士を出すたぐひ。爰に至て詮議なし。一たびは苦しからず。後の隱士は過ぎてあやまちなり。必うらやむ所にあらずとなり。

老吟の骨（同）

發句は門人にも作者あり。附合は老吟のほねと云給ひけると或俳書にあり。

好く好かざるによりて（同）

句の姿さのみかはるにもあらで、人々の腸をしぼる處、きくものゝすくすかざるによりて、言下に心の如く聞なし侍らんは、本意なしといへる、よしあり。

(一)「しゐて」の下脱字あらん

『笈の小文』といふ號（同）

師の曰。我句ども多くの集に書あやまりおほし。是をみづから書本とし、門人の志を以て二三句ほどづゝ書そへて、處々の歌仙一折づゝ、是も伊賀の門人を初として、志を以て書留べし。號を笈の小文とせん、又小文とばかりやすべき。此號は或方にて能見侍るに、太刀とかいふ謠に此事あり。よろしき集の名とおもひとめたるなり。書號によろしき物など常に見置べし。拙號はあさましきものなり。萬に心づかひ有る事也。

牡丹に芍藥（同）

牡丹に芍藥を付る事は有まじ。是は心(一)の好所にて差合にはあらず。付らるゝはたらきあらば、付て猶よろしかるべしと師の詞なり。萬に此類あるべし。門人心得てすべき事なり。

似たる句（同）

師の曰。相似たる句は、集に出す時、外に置て、まぎらはしくせざるよし。後猿みの(二)に師が蕎麥の花の句、猿蓑が蕎麥の花一所にわざと置き侍るとなり。

試驗（同）

付句の心得いろ〳〵云出られし時に、前句を添て付心の顯るゝなどなして見るべしと、さま〴〵句をせさせて見侍られし事もあり。

これ一體（同）

又猿みのに脇三を三體に仕わけてなし置きたり。心を付て見るべしとなり。「身はぬれ紙のとり所なき」と云ふ句を云ひ出侍れば、師の曰。これ一體新に見え侍るなり。體格はさだめがたし。心がけて勤るに猶あるべし。

琴三味線の句（同）

又琴三味線の類、句古びて世上あつかひ兼ねたり。試に作して見よと、いろ〳〵句作りを見られし時も

(一)「心の好所」恐くは「心の不好所」ならん。

(二)「猿蓑」に芭蕉の蕎麥の花の句あれど、猿蓑の句なし。此項の記事不審也。

あり。道にすゝむものゝ勤る處斯の如き事も有るべき示なり。

思ふところにあらず（同）

或二三子俳諧にしほこりて、歌仙二三卷老翁に點を乞ふ。師これをうけず。再三の後其人に對して曰。みな秀作なり。しかれども我おもふ處にあらず。しひて取んとせば、是彼の内此二三やり句と捨られし物や取侍んとなり。其人猶思ひ止ずして、終に師の門に入しとなり。

人の爲ならば（同）

師の曰。句は天下の人にかなへる事はやすし。一人二人にかなへる事かたし。人の爲になすことに侍らば、なしよからんと、たはれの詞なり。

初心の道をそこなふ所（同）

師のいはく。俳諧に思ふ處あり。能書の物書るやうにゆかんとすれば、初心道をそこなふ所有りといへり。いかなる處ぞと問申せども、しか〳〵ともこたへ給はず。其後句を心得見るに、くつろぎ一位有、高く位に乘じて自由をふるはんと根ざしたる詞ならんか。末弟のまよひて道を疎にせんことを、何かに付て心にこめて、つゝしみの詞なり。

一座の興に入らず（同）

師の曰。其角は同席につらなるに、一座の興に入る句を云出て、人々いつとても感ず。師は一座その事なし。後に人の云る句はあることも有となり。さあるべき事なり。又曰。座によりて一坐の人にとれて、句をそこなふことあり。門人常に心得べし。其角は生質としてこゝに居らずとなり。

二三目跡へ（同）

又いはく。一とせ對面のはじめ、いひ出られ侍るは、俳諧能過たり。其ならば二三目跡へ戻してすべしと示されし也。面白き教なり。

氣變（同）

或時試に歌仙一卷四吟しておくり侍れば、我おもふ所かく見知侍る也。此上いふ所なし。猶秀物は時の仕合、機嫌をうかゞひ、千變萬化口の外より感ずべし、氣變にまかすべしとなり。

聞えぬ句（同）

諸集の内聞えがたき句あるよしを尋侍れば、師の曰。故ある句は格別の事なり。さもなくて聞得ざると有は聞えぬ句と思ふべし。聞えぬ句多しとなり。

私意（同）

師句作り示されし時、腹に戰ふものいまだありとなり。感心の趣なり。是師の思ふ筋にうとく、私意に作る所なり。元を勤ざればなるといふことなく、只私意を作るなり。工夫して私意を破る道あるべし。

誠の俳諧（同）

師ある時、土芳に嘶の序に曰。いつにても機嫌をはかり、誠の俳諧してとあり。後あるじの云。翁の詞其誠の俳諧と云事はいかなる事にかと尋らる。師の心しらず。おもふに餘念なき俳諧の事なるべし。師も氣にのらざれば、餘念なき俳諧いつぞは〳〵、など申されしなり。

人にも聞かせ見む（同）

師の句にても再三吟じて、猶心得がたくやおもはれ侍りけん、其句書付よ、人にも聞かせ見ん。と聞えける事も折々あり。おろそかならざる所、門人としてわすれまじき處なり。

慎むべき事（同）

人の句前にて、趣向いろ〳〵沙汰すること慎む處なり。或月次の座にて、其事を門人に示されしことあり。

俳諧きらふ人（同）

師の曰。俳諧をきらひ、俳諧をいやしむ人あり。一方有ものゝ上にも、道を知ざる事には、斯るあやまちも有ることなり。其品何にもせよ、俳諧ならざること更になし。其人甚だ俳諧をして事をさばき、事をたのしむとなり。

神樂堂 （同）

師の神樂堂と云ふ句を難ずる者あり。師の曰。俳諧は平話を用ふ。常に神樂堂といひならはし侍れば、深き事はしらずとなり。其後此事を尋ねたる人あり。師の曰。唯一の神道には神樂殿、兩部には神樂堂と云ふ。むづかしく云わけして益なし。只俳諧には神樂殿をかしからずと或俳書にあり。

季と戀と （同）

季にて戀をつゝむこと。戀の句にて季をつゝむこと。むかしはきらへども今は苦しからずとなり。

絶景にむかふ時 （同）

師の曰。絶景にむかふ時は、うばはれて不叶。物を見て取所を心に留て不消。書寫して靜に句すべし。奪れぬ心得も有ることなり。其思ふ處しきりにして、猶叶はざる時は書寫すなり。あぐむべからずとなり。師松島にて句なし。大切のことなり。

俗語を正す （同）

師の曰。俳諧の益は俗語を正すなり。常に物をおろそかにすべからず。此事は人のしらぬ所なり。大切の處也。と傳へられ侍るなり。

當座の題 （同）

師の曰。結び題の發句などの時に、たとへば五句ある時は、秀作三句は過るなり。當坐の題は猶其心得あり。歌の題の事もかやうの事とやら聞え侍るとなり。

書きやう （同）

師の曰。撰集、懐紙、短冊書習ふべし。書やうはいろ〳〵有べし。只さわがしからぬ心づかひ有りたしとなり。猿みの能筆なり。されども今少し大なり。作者の名大にていやしく見え侍るとなり。

能書 （同）

能書の物書くには、歌の詞、手蹟柴などちがふこと必あり。不思議におもふべからず。假名などのつゞき、時の拍子、又書さま見ぐるしき所、書ちがへたることおほしとなり。

俳諧の障 （同）

師常に我をわすれず。心づかひあることなり。或方にて貴人師を座上に請待せらるゝことしきりなり。師の曰。此所似合の處と落着申すなり。席過ぎ侍れば心しづかならず。俳諧の障になり侍るの間、心まゝにと願ふなり。尤の事也。

駕籠を下る （同）

又ある旅行の時、門人二三子伴ひ出られしに、難波の少しこなたより、駕籠下て雨の孤に身をなして入申されしとなり。其後此事を問ば、斯る都の地にては、乞食行脚の身を忘てなりがたしとなり。駕籠をかるに價を人の云ふごとくにいつもなし侍るとなり。

目に見えて （同）

師或方に客に行て、食の後蠟燭をはや取るべしといへり。夜の更ること目に見えて心せはしきとなり。かく物の見ゆる所、其自心のおもむき俳諧なり。つゞいて曰。いのちも斯のごとしとなり。無常の觀猶亡師の心なり。

死後に見よ （同）

ある年の旅行、道の記少し書るよし物語あり。これを乞て見んとすれば、師の曰。さのみ見る處なし、死て後見侍らば、是とても又あはれにて見る所も有べしとなり。感心なる言葉也。見されどもあはれ深し。

（一）『座上』恐くは『上座』ならん

鵜縄（同）

師一とせ、岐阜の鵜飼見の時、鵜飼一人に十二羽づゝ、舟に篝して、其光りにこれをつかふ。十二筋の縄竪横にもぢれてさばきむづかしき事を、やすく是をなす。鵜飼に此事を尋侍れば、先もぢれぬよりさばきて、なまもぢれなるものを又さばく。むづかしくもぢれたるものは、ひとりほどけさばくるといへり。萬に此心は有るべしとなり。

句作はなくてもあるべし（同）

ある門人の事を云て、かれ必此道にはなれず、取付侍る樣にすべし。俳諧はなくても有るべし。只世情に和せず、人情通ぜざれば、人調はず。ましてよろしき友なくてはなりがたしとなり。

是非の地（同）

又曰。人是非に立る筋多し。今其の地にあるべからずと、恨あるべき人の方にも行かよひ、老後には心の障もなく見え侍る事あり。

聖徳太子の冠（同）

一とせ大和の法隆寺に太子の開帳有り。其頃太子の冠見落し侍るとて、後の開帳に又赴かれしなり。斯る古代の物を心にかけて旅立れし心のほど思ひやるべし。

詩は隠者の詩（同）

或禪僧、詩の事を尋られしに、師の曰。詩の事は隠士素堂と云ふもの此道に深きすきものにて、人も名をしれるなり。かれ常に云。詩は隠者の詩、風雅にてよろしと云となり。

祕（同）

師の曰。定家卿五首の祕歌に、こぬ人を入ると云ふ説あり。此祕と云は只難なき歌を出したる所を云ふとなり。撰者の身として、すぐれたる歌もおとなしかるまじとの心づかひなり。難ある歌も猶いかゞなり。此心得を祕と云ふとぞ。よき見せしめなりと師もいへるなり。

伊勢が歌（同）

伊勢が歌の『年を経て花のかゞみとなる水は』とある。此五文字なくても下ばかりにて歌よく聞えたり。此五文字、とし〳〵水きよくすみて、水のかはらざるに、花の散かかるをくもりといへるなり。五文字粉骨の歌なりと師のいへる也。

義理をつめたるは卑し（同）

『なみだ川たえずながるゝうき瀬にもうたかた人にあはできえめや』此歌のうたかたは、むしろと云ふ字、何ぞと云ふ字、二説あり。義理は何ぞなり。何ぞ人にあはできえんとなり。されども定家卿の云。何ぞと義理をつめて見るべからず。いやしきなり。うたかたは只水のことにいはんと思ひていへるばかりと聞えしとあり。亡師も義理をつめるはいやしといへる、面白しとなり。

『人は云ふなり』（同）

(一)古今の序に、歌人のうたざまをおの〳〵難じたるやうに貫之の書なせるなり。師の曰。難じたるにあらず。其人々の粉骨の所を見顯し賞したる所なり。喜撰法師の曉の雲のこと、我庵はの歌の末、人はいふなりとあるあたりなり。いくたびも味ふべしとなり。

呼子鳥（同）

(二)呼子鳥の事。師の曰。季吟老人に對面の時、御傘に春の夕ぐれ梢高く來て啼鳥とおもひて句をすべしと有り。貞徳の心いかにと尋ねしに、老人のいはく。貞徳も古今傳受の人とは見えず。全く句をせざることなりといへるよし。師のはなしあり。

峰入（同）

(三)雁の峰入、逆の峰入、ともに夏なり。むかし紀國路より峰へ入て是を順と云ふ。今はよし野路より入

(一)「三冊子」に此次に、かさゝぎの歌、濱庇、よみ歌の清濁の三項あり。今「一葉集」に從つて收錄せず

(二)「三冊子」に此次に濱荻、雨、風、虫の數項あり

(三)「三冊子」に此次にはねる字をにとよむ、心の駒、心の松、心の杉、鳴子、田鶴、朝の月の數項あり

て是を逆と云ふ。今の峰入は逆なり。もろともの歌、順逆ともに夏故に感深しと師の云也。

貌よ鳥　（同）

〔一〕貌よ鳥。『春されば野邊にまづなくかほよ鳥聲に見えつゝわすられなくに』と云ふは雛子をよめり。又鶯蕎をもよめり。『霜氷る岩根につるゝ貌よ鳥なみの枕やわびてぬるらん』これをしなり。定家卿の云。かほよ鳥春の鳥なりとなり。師の曰。說々あれども、只春の小鳥のいつくしきをいふと知べしとなり。

つぼすみれ　（同）

〔二〕つぼすみれと云ふは、舊國のすみれ也。つぼの內のすみれといふことなり。一たびよみて言葉やさしきに依てすみれの名になして、山野にもよめるなり。師のいはく。此類の事どもみな有ることなりとぞ。

『大方の露』　（同）

師の曰。『大かたの露には何のなりぬらん袂におくはなみだなりけり。』此歌は鳴立澤にまさる歌なり。おもしろしとなり。

是非に交りながら　（俳諧正語抄）〔三〕

浪化云。翁若き時より和歌をよくせり。季吟を師として武江の素堂を友とし善し。一夜秋雨の蕭颯たる寢覺に『芭蕉野分して盥に雨をきく夜哉』と此句に庭中の芭蕉を拈却して我號には得たり。嘗て佛頂禪師と茶話の詞あり。曰。道心を求んとするもの、もし市中の愴忙に飽きて幽谷にかくれん。其はじめに飽くものは又其終に寂寞に飽かん。されば今日の是非に交りながら、其是非につかはれずして、自在に道を得んことは此俳諧にあそびて名利を脈はんにはしかじと。此故に禪と和歌とを合て今の正風體の名は得給へり。故翁生前の句は、多くは皆觀相の句也。

『唇さぶし』　（同）

浪化云。翁或時其角を誡て曰。己が長に誇るべからず、人の短を云べからず。

(一)「三冊子」に此句に殘雁の一項あり

(二)「三冊子」に此句に稻妻、苗代、夕さり、夕まぐれ、はだれ雪、すゞろの芒、かつこ鳥、氷の衣、侘、若菜、霞、月の影の數項あり

(三)「俳諧正語抄」は浪化上人の遺稿と稱して文政十二年泉籌園琴而の上梓せるもの也。「一葉集」の編者或は寫本により抄錄編入せるならん

ものいへば唇さぶし秋の風

此句をえて、其角一生他の是非をいはずとなり。

一句の作あらずとも　（同）

俳諧はあたがちに口にばかり唱ふるものにあらず。心よく此道に達し。今日の人情に通達して、是非變化自在ならば、一句の作あらずとも我高弟と翁は宣へり。

風雅の魂　（同）

或時其角が句に

足あぶる亭主に問ば新酒かな

翁此句を見て、汝も既に風雅の魂はえたりとほめ給へるよし。其角が生質只句の曲なる事を好て、さびしき念なし。さるに巧言を捨て、言葉の平生に落ちたれば、行末たのもしきとゆるしたまへり。五老井が句に

十團子も小粒になりぬ秋の風

此句を聞て、既に俳諧の骨髓を得たりと宣へり。是は我智にほこらずして、風情のさびしきをほめ給へり。

『山更幽』　（同）

浪化云。翁は常に杜少陵が詩の『伐木丁々山更幽』と云ふ句を稱して、俳諧も此悠遠にならへと宣ひ、又長嘯の歌に

のがれいづる燒野のきゞす峰にまた
おどろくばかり啖くつゝじかな

と聞えし歌を以て、風色を是にならへとも宣ふ。

むさし野は月の入べき山もなし
草より出て草にこそいれ

此下の句は理窟にして、更に風雅なし。

尾花の末にかゝるしら雲

といへば風雅にして理窟なしとぞ。是等のさかひよく〳〵辨へ知べし。

まことの妹背　（同）

浪化云。翁むかし肥後の山中を越給ふ時、五十ば

かりの男の、それが婦とおぼしきが俱に薪を下して坂中に休らひ居たり。女は男の苦をとぶらひ、をとこは女をいたはるあり。翁近くよりて云。妥らあたりの人にや、太懐にこそと有りければ、男のいへる、賤は向の山の洞より日毎〳〵夫婦薪をおひて城下へ賣なし、共日の糧を求め、日暮れば歸り、終夜佛恩を悦ぶ外他の念もなく、山中につかるゝ時は足をそらし、空の雲を見る。此たのしきことは翁も知給ふまじといへり。翁此こと葉にめで給ひ、門人に物語られける。さは富女のみやびやかなるも、妬みあらばおそろしく、傾城のいつくしきも、僞がちならば口をしかるべし。中々賤の女にはまことのわりなき妹背はあれと、いよ〳〵感じ給へりとなん。戯ごとのやうに似たれどありがたき樣なれば書付たるよし、古き書に見へ侍る。

直江津の芭蕉（同）

浪化云。翁一とせ文月ばかり陸奥行脚を經て、越路へかゝり給ひけるが、直江の津とやらんゑふ處のある寺に立よりて、此寺に知音の人の添書持たりとて宿を乞給へるが、旅のつかれの笠は雨風に吹破られて見る影も淺ましかりしを、主の僧物かげにうかゞひ見て、よしなくやおもひけん、宿はなりがたきよし申しければ、翁何となき風情にて、佛前に一禮して立出給へる。番僧ども引とゞめて、俳諧の上手なるよし、發句してたべと望みあへり。翁安き間の事よとて、筆とりしめして書付給へることあまたにおよべり。曾良大に腹だゝしく引立まゐらせける。曾良が申けるは、誠に時こそあれ、秋の日のいとみじかく、山の端近く暮れかゝるに、やどかすべくもなき處に、無用の振舞にこそと腹立ける時、翁は門前の石に腰かけながら、曾良を制して曰。左樣の心底にては行脚の一筋も覺束なく候。はじめ思ひ立ぬる日より、いづれの木の下にも一夜を明し、因緣にまかせて行脚すべき覺悟ならずや。斯る折にこそいとゞ佛說の高恩もたふとまれ、婆婆のあはれも我身にふれて、俳諧の大道には入るべきなり。其上宿せぬ主の心と、發句望る僧達の心と、人も心も格別なり。

大節に臨んでうばふべからず。造次にもよくし、顚沛にもよくするとこそ見え侍れ。と杖曳きながら立出給へり。折から竹風と云ふものゝとゞめまゐらせ茅屋にも休らひ給へよと云りければ、翁曰。御志有がたく候へども、添狀も有りける方を空しく過ぎて、外に一夜を明さんもいはれがましく覺え侍れ。とてもなるべき筋ならば、はじめの主の軒のつまにても立明したきよし申しけるを、竹風聞て、いと安きことなり。幸我菩提所なればいかやうにもといざなひける時、石鉢の水を手づから汲みかけて足なんど洗ひて、佛前の側に安坐し給へり。一間の次に曾良がかしこまりたる有さま、尋常の人には見えざりしとぞ。此夜住僧恥を忘れて扇面を出し、翁に讃を乞し時、翁筆をとりて『開三寶是三界、疊一本唯一心。涼しさをたゞいつまでも忘るなよ。』

文月や六日も常の夜には似ず

と云ふ句も此時なるべし。奥羽の行脚に曾良を供し給へること、曾良は生質膚撓まず、目まじろがず。いかさま岩頭に倒れ死んに、たやすくかいしやくして、去留にやぶさかならざる彼が勇あるをたのみ給へるにや。

恨をわすれて（同）

はじめ翁をそしり欺きたる輩も、かれこれ有り。されども終にはおのれおのれが方より、便もとめ慕ひければ、恨をわすれて共人を直くし、ちなみけるよし。翁俳諧を勤て終に俳諧をわすれたるより、此道には達し給へるならん。孔子の曰る直を以て怨に報るといふなるべし。

一物の句（湖東問答）

毛衣につゝみてぬくし鴨の足

此句は殊に一物の上にて作したると、支考にかたり給ひけるとなん。

子供を觀察せよ（同）

翁遷化のとし關東より道筋、尾張に立より給ひけるに、門人當時の風をうかゞひければ、たゞ子供の

する事に心を付よとのたまひけると聞り。

きのふの我（同）

去來云。許六のいへる、きのふの我に飽たりと、まことに善言なり。師も此事折々しかり給ひき。

翁の號憚あり（同）

芭蕉を翁と書くことは、其角先師を貴び、はじめて書く。しかれども私にせず。むかし其角我にかたりけるは、今度都に來り、師の名高きことをいよ〳〵知侍りぬ。同門の人、師を貴びて翁といふのみにあらず。他門の人我にむかひて翁〳〵と稱す。まして季吟は師の師なり。其子の湖春を先として翁といへり。しからば門人のはゞかるべき事にあらず。重て集を出さんに、翁と書くべしといへり。答申けるは尤の事なり。今俳諧の集において、翁と書かんに天下の人、芭蕉翁たることをうたがはじ。雅兄これをはじめて、同門の人の手本となし給へと云ふ。此故に其角が集にはじめて是を書きし。又はせをと後に改る事は、猿みの撰集し侍る時、句の下に翁と書く。先師の曰。此頃門下の集を見るに、只我を翁と書けり。尤はゞかるべし。去來云。師の謙退においては然り。弟子の尊敬に至ては、翁と書せんこと苦しからじ。先師曰。されば門人なれば、自分の家に藏めんにはともかくもあるべし。是を世間にひろめ、人に沙汰せんには、却て淺間なるべし。人丸赤人の歌の聖ときこえ侍るも、いづれの集にか其名書かざる。かさねて必翁と書くことなかれ。と下知し給ふ。これに依て猿みの集にあらためて芭蕉と書侍るなり。別に師を尊む淺深あるにあらず。

傳授（同、餘評）

或人問云。蕉門の附句十七體の教ありとなり。一とせ路通長崎[1]に來て、人々に傳授する。定て此事を聞給ふらん。去來答曰。十七體とやらん、四體とやらん、書きたる文を破り給ふ事は承り侍る。是を傳授し給ふ事はしらず。先年野水、先師に語て曰。近來大津の連衆、名護屋に來て、蕉門十七體の付句殘

(1)「湖東問答」に『長崎』を『此浦』とす

らず傳授し侍るよしを申す。名護屋の連衆曾て信ぜず。もし斯る事も侍るや。先師の曰。是まことに途方もなきことなり。先年加賀の門人何がしが許より、常に遠國に侍れば、親しく教を受ることも叶はず。願くば付句の體を書記し示し侍るべきよしを望む。是が爲に付句の大數を書出し侍れども、如斯記さば、却て初心のまよひ有るべしと思ひとりて、終に其書をやむ。さだめし反故のはしを拾ひ取て、是を云なるべし。と大咲ひし給へり。おもふに、此文をとゝのへ給ふは、大津にての事なり。路通久しくかしこに侍れば、其文を見て其旨をしらずして、みだりに遠境の人に傳ふなるべし。尤付句は千變萬化して、數を以て云ふものにあらず。

撰者の句（宇陀法師）

師說云。撰集に撰者の句あまた入る事、むかし千載集の時、再勅許有て、俊成卿の歌加增せられたることあり。當時俳諧撰者憚なくともゆるすべき事。

大廻し（同）

あなたふと春日のみがく玉津島

此句連歌の大廻しにひかれたれども、大廻しにあらず。五文字にて切たるよし。先師相傳の時申されけり。大事の習也。

四句目、六句目（同）

許六云。四句目、六句めにふり有こと書々に出たり。沓冠の擶ひたる句のらぬ物也。近年四句め、六句めは點のなき所とて、點取俳諧衆きらふよし。能句ならば處にはよるまじ。翁戯れに曰。點のなき四句め、六句めに秀逸して肝をつぶさせたるがよしとて、常に案じられたる事も有りけり。

外の藝の達人（同）

師云。老翁が俳諧は五歌仙に極めぬ。こゝ[1]に至らざる人、一生俳諧ならずともいへり。大切なる事にして、又心易き事なり。多年俳諧好たる人よりは、

(1)「宇陀法師」に『こゝに至らざる人』の八字なし、されど、今「一葉集」に從ふ

外の藝に達したる人、早く俳諧に入るとも申されき。

末のおくるゝ事（同）

許六云。發句平句ともに、末のおくるゝと云ふ事有り。歌にも大切に申給ふよし。

降つみし高ねのみゆき解けにけり

と、つよくいひ侍るには、

清瀧川の水のしらなみ

とならではなりがたきよし。ある時深川の庵へ訪ひける時、夜べさる會にて（校訂者曰。此間に『鼠は舟を』の附句の事あり。『自慢』の項に同じければ省略す）例の鼻をくん〳〵と吹ならし、予が一句すれば一座はつといひたるまでにて、草鞋はきて胸中をさがす人なし。とよろこばれけり。

平話の道具（歴代滑稽傳、俳諧指南）

許六云。一とせ芭蕉庵にて三吟俳諧ありける時、

寒菊の隣もありや活大根　　許　六

寒菊にいけ大根同季の取合せなり。

冬さし籠る北窓の煤　　翁

此句、世間煤を雪とする句なり。煤の一字俳諧のよみかたにして、達人の手柄といふはこれなり。しらぬ人は等閑に見通し、蕉門の不可思議をしらず。第三嵐蘭にあたれり。數刻案じ申されけれども出ず。後に宿のよせ馬など、いつも此樣な横小路へひき入置候。と申されければ、先師の曰。よせ馬といふもの、いまゝでいく千度出候やらんしらず。是みな世にある三合のうちなり。と申されければ、在郷より宵から馬を連來り寒がらせ申すと、嵐蘭かさねて申されければ、眞直にそれがよき第三にて侍るなりとて、

月もなき宵から馬を連て來て　　嵐　蘭

と、先師句作り申されたり。是は人情平話の道具を以て、俳諧の形恰合(一)に切り合を出したるものと知べし。後代の人、此句をよく得心したらば、猿みの以後の四五集、明らかに埒明べし。又深川の俳諧に、

奉行(二)の槍に誰もこはがる

と、云ふ句翁せられければ、後に誰の一字は前句の

（一）恰合は恰好なり

（二）『俳諧指南』に『奉行の槍』の前に、『綿だて並ぶ』の脇及支考の事あり。されど今「一葉集」に從ふ。『綿館』は『深川集』洗足『奉行の卷の脇』は同じ句にして、下七『誰もかくるゝ』とあり

噂なりと、くやみ申されたり。

『古池や』の句（葛の松原）

芭蕉庵の叟、一日嘗焉としてうれふ。曰。風雅の世に行はれたる、たとへば片雲の風に臨めるがごとし。一回は皂狗となり、一回は白衣となつて、共にとゞまれる所をしらず。かならず中間の一理あるべしとて、春を武江の北に閉給へば、雨靜にして鳩の聲ふかく、風やはらかにして花の落る事おそし。彌生も名殘おしき頃にやありけん、蛙の水に落る音しば〳〵ならねば、言外の風情この筋にうかびて、『蛙飛こむ水の音』といへる七五は得給ひけり。晋子が傍に侍りて、山吹といふ五文字をかふむらしめんかと、をよづけ侍るに、唯古池とはさだまりぬ。

茶をのむ人（同）

一とせの秋、『蔦の葉は茶をのむ人をなぐさめて』と云へる第三を、湖南の珍碩はいかに聞らんと、文して問侍られけるに、花紅葉ならば酒をこそ飲むべけれと答へたれば、さては已れも皮骨えぬるをと阿叟もにくみ申されしなり。支考が東行の頃、風雅はいかにし侍らんと、問人あれば、先この第三を明し給へといふに、よき人はよく、あしき人はかの叟の口癖にて、又寂寞をやられけると、平吞にあひたるはいと口をし。

砂川の水（別座敷序文）

翁ちかく旅行思ひ立給へば、別屋に伴ひ、春は歸庵の事を打なげき、扨俳談を尋けるに、翁。今思ふ體は淺き砂川を見るごとく、句の形、付心ともに輕きなり。其所に至りて意味ありと侍る。

其角の『訪はれ貌』（葛の松原）

晋子が『宿札に假名付したる訪れ貌』といへるは、下の五文字にて能くしづめたりと、阿叟も常に申されし侍しか。

正秀が性（同）

かたびらを洗はずにやる名殘哉　正秀

正秀が性はあらし。かゝる微細の風情にあまりて、曾良が大和路の歸路をとゞめかね、角とおくり申されしとかや。『猪に吹かへされしともしかな』といひ得て肌たはまざるは、その人のいける風情なるを、『薪ともならで朽ぬる案山子かな』といへるは、風雅の用所あさからず。と阿叟もうなづき申されしよし。

『月くらき』（同）

一句のしたて、結ぶはわるしと承れど、未熟のまどふべき事也。『月くらき麓は馬の口とりて』と云第三を、支考が申侍りたるに、くらきといふは結びにて、一句のさま氣高ならずとて『有明』とはあらたまり侍りき。

此句の入處（同）

しら桃や雫もをちず水の色　桃隣

緋桃は火のごとくならねど、しら桃はながるゝに近かるべし。久しく薪水の勞をたすけて、此句の入處淺からずと、阿叟も起上り申されしなり。

（一）『笈日記』に九月八日の事とし、『その日かならず奈良まで急ぎて、笠置より…』

馬上に槊（同）

かりねせん味方が原のをみなへし　史邦

馬上に槊を横へて吟ずる人は、今の世にはあまた侍らじを、味方が原のかり寢せんといへる。此郎の風流ならずや。阿叟もあしからずとゆるされ、左右十八につがひ申されしを、深く武具の櫃にをさめける也。かの所に名をとゞめけん草のゆかりにも、幾秋の手向とはならまし。

『蜜柑の色の』（笈日記）

翁遷化の年、惟然、支考を伴ひ、伊賀より奈良(一)に出給ふ、みち笠置より河舟に乘て、錢司(ぜにつかさ)と云ふ處を過るに、山の腰すべて蜜柑の畑なり。されば先の夜ならん、

山はみなみかんの色の黄に成て　翁

と承りし句は、正しく此所にこそさぶらへと申ければ、あはれ我腸を見せけるよとて、阿叟も見つゝ笑ひ申されし。

『菱の花』（同）

長のたつ處かぎりや菱の花　雲鴻

支考云。此菱の花は落梧子が便して、阿叟も一筋の風流、いとよし。と申されけるよし。

律儀に習へ（柿晋問答）

其角曰。付合の句は付過るを病とす。されど初心のうちは付過るほどに付習ふべし。得たる上には自由になるべきなり。先師初俳をみちびき給ふにも、發句付句ともに律儀にいひ習ふべし。又付句は眞實に付くべし。初心の時より上手めきたる句、飛退たる、はなれたる等の句なすべからず。初心の時は目立つやうに見ゆれど、後々埒もなうなるべきなり。と宣ひけり。

舌頭に千轉（同）

去來曰。(一)

ひ申されし。

（一）『去來抄』同門評にもあり

（二）『柿晋問答』に『印轉』とあり。恐くは『千轉』の誤寫ならん

うの花に月毛の駒の夜明かな　許六

此句予此趣向あり。句は有明の花にのりこむと云ひて、月毛、芦毛馬は、言葉つまり、のゝ字を入れば、口にたまり、さめ馬は雅ならず、紅梅、さび月毛、河原毛おもひめぐらして首尾せず。其後許六が句を見て不才を歎ず。實に畠山右衞門佐といへば大名、山畠佐右衞門といへば一字を加へず庄屋なり。先師の句調はずんば舌頭に千轉(二)せよ。とありしはこゝの事なり。

俳諧を忘れよ（同）

其角曰。俳諧の工夫は今日の上にして、風姿おのれと其佳吟を待てるものなり。されど俳席に臨むとも屈情すべからず。屈情あれば句しぶり、心くだけて、更に取べきなし。予が常に俳席に出るごとに、上を白眼んで句案し侍るを、人々はことやうに思ひもすらんなれど、句の死活何ぞ胸中によらざらんや。先師常に、俳席に臨ば俳諧をわすれよ。はいかいを忘るゝ上に今日何事かある。只見るもの聞くこと俳

諧ならずと云ふことなし。と宣ひけり。

さし合上手より俳諧上手（同）

其角曰。さし合等の事。先師曰。おほむね御傘、はなび等を用ふべきとなり。惣て差合の事は、あらましをさへ覺侍らば、しひて吟味すべき事にはあらじ。これ俳諧を無量ならしめんが爲なり。先師もさしあひくりの上手といはれんよりは、俳諧に上手のかたあらまほしと宣ひき。差合の吟味にひまどりて、俳諧に未熟ならんは、かの說經習ふことを後に、馬乘習ひけん法師にことならずぞ有べき。

淺きに戻るべし（同）

去來曰。發句付句ともにだん〳〵深く案じ入りつゝ人に伺ふに、趣向はさもあらんなれど、一句の上聞えぬよしを答ふ。是を聞得ざるかと人を疑ふは僻ごとなり。我は初發より趣向を胸に忘れざれば、深く案じて、句面に趣向の浮ばざるに心づかぬ故なり。是等執心に案ずる上にまゝこれあり。俳諧の修行地は、淺きより深きに入り、深きより淺きに戻るべし。とは先師も敎置かれしなり。

はやく上手に（同）

其角曰。人情と人倫とひとつの事のやうに覺え侍るやからあり。大に相違の事なり。人倫は人の品。人情は其心〳〵なり。されば付合は前句打越の姿をさだめて、其品をわかつ時は、たとへば百句が百句、人を以付るとも、差合の沙汰をのがれ、しかも其一卷句々連綿していと興あらんか。されど序破急を取はづすべからず。凡初心の修行は、卷數を以て功をつむべし。卷數なければ、一卷の序破急おのづからさだまることかたし。先師は俳諧ははやく上手になるべし。其うへ功を積むべきなり。と宣ひけり。

一風に止まるまじ（同）

其角曰。(一)およそ吟ある時は風あり。風は必變ず。是自然の事なり。先師是を能く見とりて、一風に長く止るまじきことを示し給へり。假令先師の風たりとて、一風になづみて變化をしらざるは、却て先師の心にたがへり。

(一)「去來抄」は之を去來の說とせり

食事の煩ひ（俳諧世說卷之一）

翁元祿(一)の行脚の終りならん、金城にしばらく杖を休め給へる時、小春亭にて一夜會合ありしに、其席の饗應山海の珍味をつらね、善美を盡したる設なりし。其終りに後會のことを約しけるに、翁曰。今宵のもてなし心づかひのほどは云ふべくもあらず。されど恨らくは大名の御成のごとくにして、風雅の寂なしといはんか。我は世を浮草のよるべ定めぬたぐひにして、或は草深き野邊に晝寢の夢を結び、或は茂りたる木の下に一村の雨を凌ぐの外、浮世に望み更になし。況や斯る珍物厚味、豈世を避るものゝ本意ならんや。もし重ねて我と交りを結ばんと思ひ給はゞ、食事の煩ひをひたすらはぶき給へ。もし飢ゑば我より乞ひなん。かへす〳〵此旨をよく守て、只風雅のさびを重んじ給ふべし。と申されたり。其次は淺野の川下なる一草庵にて會席あり。人々前の誡に恥おそれて、其夜は濃煎茶の下くゆらすばかり、箸取べき物は何にても出さず。やゝ更行まゝに、翁曰。席もはや闌なれば、人々の腹空しかるべし。冷めしあらば鉢ながら出さるべしと有りければ、主人いと易き事なりと云ひつゝ、手づから鉢を抱へ來り、其まうけの心ゆかぬを謝するに、翁曰。諸禮停止は風雅の舊制なり。何の謝する事やあらん。みな〳〵近う圓居し給へとて、茶漬一二椀さら〳〵打したゝめ、風雅は斯くこそあらまほしけれ。すべて酒食の奢に際を費して、俳諧の味を忘るゝは、遊里戲場の物ずきにして、風雅の席には無下たりといふべしと示申されける。金城の人々此詞を感じ、夫よりしておのづから奢をいましめ、風雅に粉骨を致すことに成て、後に至ても北枝叟暮柳舍のごとき、諸國に名高く呼ばれたる人の出來し事も、いはゞ斯る敎誡を世々よく守りぬる故にこそ。

（湖中云、(二)しら露のさびしき味をわするゝな、翁此時の吟なり。一書に濃州大垣の如行が席上の饗應を制して、此句を作せられしといへり。然れども今關更が世說を見るに甚詳なり。加州にての吟實事なるべし。）

(一)「俳諧世說」はこの下に尙數行の文字あり、末尾に白露の句を記せり
「一葉集」に此次に芭蕉城に逢ひし一項を「隨齋諧話」によりて記し、尙「俳諧世說」同じ記事との相違を擧げたる上、不審多しと附記せり。依て、省略に從ふ
(二)「奥の細道」旅行の時

捨人の身（同）

翁北國行脚の時、金城の萬子遲くして、別れの對面に後れたることをなげき侍りて、翁の跡をしたひて、裸脊馬に打のり追かけられしに、松任にておひ着きたり。さて對面ありて馬の餞とて白衣一つ金三兩を取出さる。翁の曰。我は一簞一瓢をたのしびて、隨庵を家とする身なり。豈絹布のかざりを求めんや。まして金銀は大盜を惹くの媒にして、捨人の身には有りて詮なしとてうけ給はず。萬子も强けれども終にゆるし給はず。又萬子始て翁に對面(一)ありし時、萬子曰。翁は諸國に門人みち〳〵て、其道の融通は事たりぬ。さらば我は方外の友と成て、あまねく俳諧を守護すべしといへり。翁も是をうなづき給ふとなん。その詞のあやまたず、終に北枝、秋の坊が窘急をすくひ、或は諸國の行脚のあるじと成て、金城の騷人を遊ばしめ、此道のおもし人と成り給ふとぞ。又翁金城逗留(二)の中、連中發句短冊などしたゝめもらひたるに、萬子は其事なく、只南無當來佛の五字を書きてもらひ、閑窓本尊となし侍る。實にや我は翁の友とならんと申されける氣象のほど、此一隅を擧て知るべき事にこそ。

(一)「俳諧世說」に初對面の時の事を別項とせり

(二)「同」に書を乞ふ事を別項とし、卷之二に收めたり

(三)「同」に『後』の字なし

禮節を忘れず（同）

翁或時、內藤露沾君の御許へ召れて俳諧ありけり。主君は素より煙草をきらひ給へり。故に翁も其席にては煙草を呑給はず。其角も其席に侍りぬ。歸りて後(三)、翁に向て云。それ滑稽は酒落風流をもて本意とす。然らば權威にも怕るべからず。高位にも屈すべからず。さるを今日內藤君の御席にて、煙草を呑給はざりしは、詔ひに似たりといはんか。小弟是に惑ひぬと難ず。翁莞爾として曰。此うたがひは俳諧を何の爲にするといふことを辨へざる故なり。夫俳諧は小技なりといへども、よく用る時は一道なり。然らば風流のうちにも、豈禮節を忘るべきや。法を破るをもて酒落とするは桀紂の徒なり。繁を省きて風流と覺えたるは頑愚の俗なり。德行の君子、六上隱者のよしとする處にあらず。今日內藤君の雅趣に煙草を禁じたるは、詔にはあらず。禮なり。いかんとなれば、我一介の乞丐體なる捨坊主といへども、風雅の道に遊び、壓尾を握て二三子の上に立つ。是をもて二三子我に宗匠の僣名をゆるす。此故に露沾君の膝近く召されて談咲をなす事を蒙る。しからば貴人の御側にて、其忌みきらひ給ふ事をなすは、其人を蔑にするものにして、趙高が鹿をもて馬にするの罪をまぬがれず。故に我煙草を呑ざるは禮なり。孔子の言葉にも、しば〳〵禮をおこなふものは世人詔へりといふと宣へり。嗚呼古今の習俗なる哉。とて歎息し給ふ。其角大に愧ぢて背汗して退きぬと。今おもふに禮と詔と紛れやすく、高邁と我まゝと彷彿たり。修行者よく是をわきまへて、氣象は高上なるべく、擧止は禮をかへりみるべし。翁の細道行脚に、渴殿山禪定の時の紙衾袈裟今に殘りて、播州增位山の風羅堂にあり。これいさゝかの物にて、殊に翁は佛頂禪師に嗣法の人なり。しかれば何ぞかゝる細禮に拘り給はん。然るを其時の小物まで捨もやらず持ありき給ふは、其時に應じ其俗にしたがひて、其禮節をわすれ給はざるの至り。あふぎても猶あまり有る高師にして、其德いよ〳〵かたく、愈高きことを尊むべし。

萬物に應ず（　）

去來正風の大意を問。翁曰。俳諧はよく萬物に應ずることをむねとすべしとなり。

「生けるかひあれ」（　）

蛤のいけるかひあれ年のくれ　翁
我もらじ新酒は人の醒安き　嵐雪

いけるかひあれのしをり、新酒は人のさめやすき、おのづからなる故に、一句の栞、幸なりと翁申されしとなり。

不吟味といへ（蕉門俳諧語錄）

野坡云。炭俵集撰の時、
御頭へ菊もらはるゝ迷惑さ
と有りて、四句ばかり有りて、又御袋と云ふ句あり。

同意の同字いかゞあらんと尋ければ、翁曰。もし難ずる人あらば、不吟味なりといひて有りなんかしとぞ。

治定の句（同）

題の心たしかに有やうにするが、上手ののがれなるべし。八朔の句に、

八朔や淺黄の紋の新しく

此句を先師曰。これはかしらの五文字をのけて、外の『七夕や』としてもそれになり、『菊月や』としても九月の句になることとなり。題の心うすきなり。八朔ならではそれとしれぬやうに、治定の句を工夫すべしと云ふに、

八朔や上着下着を取て置き

『七夕や』にては少しもをかしからず。右の句なれば、治定の八朔なり。けふばかりのはれなればや、取出して少しかびくさき氣も有るべし。八朔の五文字たしかに居るなり。

(一)此一項は「雅文そうそこ許六より野坡へ」に與へし第一坡の書簡の回節の書簡の一節を剪裁し錄したるものにして、夢の語も錄せる也。許六の書簡によれば、紙帳實際日數の事は實際日數誠に疑はしなり

心の作（同）

翁曰。句を作るに作り過ては心の直をうしなふ。心の作はよし。詞の作このむべからずとなり。

五六分（同）

翁曰。句は七八分にいひつめてはけやけし。五六分の句はいつまでも聞あかずとなり。

數寄屋（同）

翁曰。句は數寄屋をたてるがごとし。丸木の柱、壁に鍛目を見せてぬりたるは、あらく見え侍れども風流なり。在邊の灰小家、石切小屋はあら〳〵とばかりにて風雅なしとぞ。

正風體（同）

翁曰。人の案じぬ處を致さんとて、心のかよひなき事を行過とは申べし。たとはゞ四月朔日更衣の朝、例より寒く、小袖かさねざれば寒き年、紙衾を賣ありくがごとし。人の賣らぬ先に賣らんとふれありきても、人々の心いまだ冬をわすれず。蚊の事などは思ひよらざれば、人も買はず。蚊の出る頃ならねば、人の心はつとはおもひよらず候。古の歌人正風體とてよみ給ふ歌どもゝ此處なりとぞ。

(二)「俳諧問答」に『贈晋氏其角書』

(三)晋子此去來の書を潤飾して、其著「末若葉」の冊尾に附したり

今はあやし（同）

日の春をさすがに鶴のあゆみかな　其角

翁曰。此五文字よろしからず。『春の日』か『立春は』と置くべき句なり。されども其角が手ぶりなり。其時ははなやかに聞え侍りしが、今是を味ふにあやしとぞ。

さびしをりを說くな（同）

去來云。凡さびしをりは風雅の大切にして、忘るべからざるものなり。しかれども隨分の作者も、句々さびしをりを得がたからん。只先師のみあり。今日我等ごときの作者、何ぞさびしをりなき句をいとひ捨てんや。是を常に願ふといはんはむべなり。又あるはなきにましたりといはんはよし。又壯年の人の句はさびしをり見えざるも却て又よしといはんか。初心の作者にはさびしをりを容易に說くべからず。却て其吟口おもく閉ぢて新味にうつりがたし。是先師の教なり。

(一)「俳諧問答」に『おもく』の三字なし

百尺竿頭中がへり（同）

文庫から朽木の看ふるひ出し　楓子

一寸の蚊の斧にむかへる　其角

野坡云。此句伽羅の事なるべし。伽羅と云て、をかしく作るは變なるべし。朱の心に白み有るはずを、かたから朱を白いといひたる句作、變ばかりをいひしなり。此眞似をする人、後には百尺竿頭にて中がへりをし、或は水底にて奈良茶飯くふやうの事有るべしと、先師はいましめ申されし。

角の行末（菊の香）

贈其角先生書(二)

故翁(三)、奥羽の行脚より都へこえ給ひける頃(四)、當門賣ありくがごとし。人の賣らぬ先に賣らんとふれありきても、人々の心いまだ冬をわすれず。蚊の事などは思ひよらざれば、人も買はず。蚊の出る頃ならねば、人の心はつとはおもひよらず候。古の歌人正風體とてよみ給ふ歌どもゝ此處なりとぞ。

(二)「俳諧問答」に『贈晋氏其角書』

(三)晋子此去來の書を潤飾して、其著「末若葉」の冊尾に附したり

(四)「俳諧問答」に『頃』の字なし

(一)「俳諧問答」に『棒』を『杖』とす
(二)「同」に『往々にしてうつらずといふことなし』
(三)「同」に『師を損ずる』
(四)「同」に『事』の字なし
(五)「同」に『流行にすゝまざる所なり』
(六)「同」に『狂客なりとも』
(七)「同」に『代々の宗』
(八)「同」に『本歌は』
(九)「同」に『とゞまりなば』

の俳諧已に一變す。我葦笈を幻住庵に荷ひ、棒(一)を落柿舎に受けて、略其おもむきを得たり。ひさご、猿みの是也。其後又ひとつの新風を起さる。炭俵、續猿蓑是也。去來問云。師の風雅見及ぶ所、次韻にあらたまり、みなし栗にうつりてよりこのかた、しば〳〵變じて、門人その流行に浴せんことをおもへり。我是を聞けり。句に千歳不易の姿あり。一時流行の姿あり。此を兩端にをしへ給へども、其本一なり。一なるはともに風雅の誠をとればなり。不易の句を知ざれば本立ちがたく、流行の句を學びざれば、風あらたならず。よく不易を知る人は、往(二)くとしておしうつらずといふことなし。たま〳〵一時の流行に秀でたるものは、只己が口質の時にあふのみにて、他日流行の場に至りて一歩もあゆむことあたはずと。退ておもふに、其角子は力の行ふことあたはざるものにあらず。且才丸一晶が葦のごとく、己が管見に息づきて、道をかぎり、師(三)を捨るたぐひにちらず。みづから及ぶべからざることは、書に筆し口にいへり。しかれども其詠草をかへり見れば、不易の句においては頗る奇妙をふるへり。流行の句に至ては、近來其おもむきをうしなへり。殊に角子は世上の宗匠、蕉門の高弟なり。却て吟跡の師とひとしからざる事(四)、諸生の迷ひ、同門の恨み少からず。翁曰。汝が言しかり。然れども凡天下に師たるものは、先づ己が形くらゐを定めざれば、人おもむく處なし。是角が舊姿を改めざる故にして、予が流行(五)に誘はざる所なり。我老吟にともなへる人々は、雲煙の風に變ずるがごとく、朝々暮々かしこにあらはれ、此に跡なからんことをたのしめる狂客(六)なり。共に風雅の誠を知らば、しばらく流行の同じからざるも、又相はげむのたよりなるべし。去來云。師の言かへすべからず。然ども(七)すべて風は詠にあらはる。本歌といへども、代々の集のさま同じからず。況や俳諧は新しみを以ていのちとす。本歌(八)代を以て變べくば、此道年を以て易べし。水雪のきよきも、とゞまりて不ㇾ動ば、必汚穢を生ぜり。今日諸生の爲に古格をあらためずといふとも、猶永く此にとゞ(九)まらば、我角を以て劍の菜刀になりたりとせん。翁曰。汝が言慎むべし。角や今我今日の流行におくるゝとも、行末又そこばくの風流(一)を吐出し來らんも知べからず。去來曰。さることあり。是を待つに歳月あらんことをなげくのみ。とつぶやき退きぬ。翁なくなり給ひて、むなしく四とせの春秋(二)をつめり。いま先生と我、東西雲裏のうらみをいだけりといへども、猶松柏霜後の齡をことぶけり。幸に此言を書して案下に贈る。先生是をいかんとし給ふや。

(一)「同」に『風流をはなし出し來らん』
(二)「同」に『春秋をつもり、いまだ我』
(三)「同」に『たゞみおり去來稿』とのこと
(四)此一項は「雅文せうそこ」野坡第一の返書中の一節なるが如し

丁丑のとし閏二月の日　落柿舎(三)嵯峨去來拜

此道の仙(四)　（蕉門俳諧語錄）

翁曰。格を定め理を知る人は、風雅中位に至る。格をはなれ理をわすれ侍る人は、此道の仙なり。

季節　（同）

翁曰。何の花は夏か秋かと、やゝもすれば人に尋る人おほし。これ心がけあしき故なり。四時の景物は目を閉ぢて見れば、目前に春夏秋冬さへぎるものなり。季節を取ちがへるは無念のことなりとぞ。

(五)「語錄」に『目前に』の三字なし。今一葉集」に從ふ

理を云はず　（同）

野坡云。先師俳諧を說ること、只其姿をいひて、さらに理をいはずとぞ。

古人なし　（同）

翁曰。中むかしもてはやせしは俳諧の狂なり。たとへば

かまくら山にあぶらぬらばや

といふに、

頼朝のまちやる月こそきしみけれ

など云ふたぐひの、しどけなき輕口のみいひ出て、月も花も笑ひ明して靜なること侍らず。夫より世になる宗匠あまた出て、

摺小木も紅葉しにけり唐がらし

の赤きを興じ、

蛇のすしや下になれぬる沖の石

の重みをもてあつかひたるばかりなりしを、世に賞翫し、人も悅びしに、貫之の糸によると詠じ給ひし、

かすかなる筋。傳教大師の三藐三菩提と誓ひ給ひし丈夫心。一に合し、諸法實相の觀となし、人間の常のあらましに付て情をはこびおもふことあらば速にいひ出べし。假にも古人の涎をなむることなかれ。俳諧の名は昔の俳諧なり。されど俳諧の名のみ有りて其物に誠なく、代々おしうつり來ることいかにぞや。此道に古人なしとのたまへり。

品高く（同）

翁曰。句を案ずる時、常に金の眞砂ちらしたる短冊に書く心得有るべしとぞ。

遺言とおもへ（同）

翁曰。附合の句は遺言とおもふべし。いかなる惡人も捨あしかれとはいひ置ぬもの也。

葉と幹（十論爲辨抄、第五段）

遺稿の夜話に、黄門の家訓をひきて、和歌に姿の大切なる、たとへ心を破るとも、姿を破るべからずとよ。一とせ伊賀の上野にて、

芋幹の脇刈したる秋の風

と云ふ句を『岡の月夜』といふに付たるを、其後の次手に故翁のいへりけるは、あの句は芋の葉とすべけれど、葉と幹とのよしあしは我と知る時あるべしとぞ。我はた其時は思ひまどひて、故翁は脇刈の仔細をしらで、其葉の無用をと疑ひしに、そののち膳所の曲翠亭にて、尾の荷兮が蔦の葉の評を聞て、さてはかの芋の葉は岡の月夜のうつろひに秋風の姿なりしをと、はじめて心骨に銘し侍りし也。

京の土地に合はず（同、第八段）

遺稿の夜話に、むかし嵯峨の落柿舍に遊びて談笑の序に、都には蕉門のまれなることをなげきしに、故翁は例の笑ひ〳〵、我家の俳諧は京の土地に合はず。そばきりの汁のあまさにも知るべし。大根の辛みのすみやかなるに、山葵の辛みの諂ひたる匂さへ、例の似而非ならん。此後に丈夫の人ありて、心のねばりを洗ひ盡し、剛ならず。柔たらず。俳諧は今日の平話なることを知らば、はじめて落柿舍の講中となりて、箸筥の名錄に入るべしとぞ。

（一）一説に嵐雪の語なりともいへり

俳諧書きむ（同、同）

遺稿の類説に、一とせ伊賀の西麓庵におはして、續猿みの撰集ありしに、武城の人々より發句をおくれり。其中に其角も三四章有りて、秋風辭をたち入たる句に、

しら雲に鳥の遠さよ飛は鴈

と云を、我も人も感吟して、これらの手づまの及びがたき事をいへば、故翁は例のほめながら、晋子が此ほどの俳諧をきけば、玉振金聲の作をもとめて、天下の人を驚さんとす。是より五年の變化をはからず、二作をかさねば、平話をうしなひ、三作を重ねば、俳諧は盡きて、其時は自己をうしなふべしと。

獅子のさゝら（同、第九段）

むかし故翁に供せられて、三河の新城と云ふ所にて、

角前髪のにくいいもづら

といふ花前に、人々案じ入たるを、我其句評に、いつぞや近江の守山を過るに、かゝるわつぱの疱瘡づらが、太神樂のさゝらを摺たれといへば、故翁は例の笑ひながら、論語の多識はいかに心得たるぞ。子貢には文をこらし、子路には文をすゝむ。教誡の二用も其事なり。それをなどいはざるやと、

咲く花に獅子のさゝらを摺ならし

と、其句を其まゝにさだまりぬ。我其時に此付を疑ひて、俳諧は斯く前句の人をとらへて、其事を直にいふものにやと、其夜はまどひていねられず。嚮野、猿みのゝ二集より、あらゆる故翁の附合を見るに、十が五は其さまなり。つとめての日、其事を申に、故翁のいへる。我と俳諧に遊べる事二とせか三とせならん。明けくれの附合を聞ながら、それらの集を見るにおよばず。それを隨類得解といひて、機緣の時ならねば、決して知りがたし。

老鶯病蠶（同、同）

ある時、故翁の物がたりに、此ほど白氏文集を見て、老鶯と云、病蠶といへる此言葉のおもしろければ、

黄鳥や竹の子藪に老を啼
さみだれや蠶煩ふ桑の畑

斯く此二句を作り侍りしが、鶯は筍藪といひて、老若の餘情もいみじく籠り侍らん。蠶は熟語をしらぬ人は、心のはこびをえこそ聞くまじけれ。是は蓬の一字を入れて家に飼ひたるさまあらんと、其句のまゝに申捨られしが、例の泊船集に入たるよし。

梅　椿（　）

或時、冬がれのつれ〴〵に、二三子打つどひけるに、いで一卷せばやとて、

打寄て花入探れ梅つばき

といふ句を出されしに、おの〳〵春季の脇し侍りしに、翁黄むづかりて、斯のごときは、皆只時物の表を聞きて、一句の主人公をとがめずと、日頃いましむるはこれなり。こは只梅椿の春季に拘りて、更に一句のなれる其全體を考へざるなり。此句のごときは、全く早映の賞翫と見ゆれば、冬季の脇付たらんこそ餘情をかゝぐとはいふべけれ。と、いましめ申されしとぞ。

竹　緣（風俗文選、定先後辨）

手水湯もまだなつかしき梅花　越中　嵐青

といへるを、手水湯に竹緣青し梅花、と翁の筆を入れ給ひけり。

高き人の低き處を（同、陳情表）

支考云。翁曰。俳諧といふに三の品あり。寂寞は其情をいへり。女色美肴に遊んで、麁食のさびをたのしむ風流は、其姿をいへり。綾羅錦繡に居て、鹹着たる人をわすれず。風狂は其言語をいへり。言語は虚に居て實をおこなふべし。實に居て虚にあそぶ事はかたし。此三の品は、低き人に高き所をいふにはあらず。高き人のひくき處をいふなりとぞ。

黒木賣を妻に（同、柴賣說）

凡兆云。翁ある時、黒木賣を見て曰。身のいやしきをおもへば、官女もかたらひ難し。心の鈍きをおもへば、傾城も猶まじはりがたし。もしいもせをなさんに、此女子をなんといたはり給へり。

おや〳〵〳〵（俳家奇人談）

宗因ある日、市村（竹之丞）座芝居見物に行たり。折節蕉翁居合せられて、初て宗因に對面せらる。時しも門人何某が句案に、子はまさりけり竹之丞として上の五文字を置かね、梅翁にうかゞひけるに、『おや〳〵〳〵』と冠すべしと教ける。後に蕉翁此事を弟子に示して、其奇才を稱嘆ありけり。

最後の病床（笈日記）

七日（元祿七年十月）

此朝湖南の正秀、夜舟より來る。直に枕のほとりに召されて、何とも云ふことは無くて、泪をおとし給へりけるが、いかなる心かおはしけむ知らず。その程も過ざるに、洛の去來きたる。乙州木節丈草おの〳〵來りつどふ。平田の李由きたる。

洛の去來はしばらくも病家（芭蕉の病床）をはなれず。いかなる故にかと申すに、此夏阿叟の我方にいまして、誰々の人は吾を親の如くし侍るに、吾老て子の如くする事侍らずと仰せられしを、いざしらず。去來は世務にひかれて、さるべき孝道もなきに、かゝる事承る事の肝に銘じおぼえければ、せめて此度はなれじとこそ思ひ候へと申されし也。

八日

之道、すみよしの四所に詣して、此度の延年をいのる。所願の句あり、しるさず。此夜深更におよびて介抱に侍りける吞舟をめされて、硯の音のから〳〵と聞へければ、いかなる消息にやとおもふに、

病中吟

旅に病て夢は枯野をかけ廻る

（一）「一葉集」に、『附錄』として「花屋日記」二十九日以後の記事を記せり。されど花屋日記」は疑問多き書なれば、「笈日記」を以て之に代へ、以て芭蕉最期の光景を明かにす

その後支考をめして『なほかけ廻る夢心』と云ふ句づくりあり。いづれをかと申されしに、その五文字はいかに承り候はむと申すはいとむづかしき事に侍らむと思ひて、此句なにか劣り候はむと答へける也。いかなる不思議の五文字か侍らむ。今はほいなし。みづから申されけるは、はた生死の轉變を前におきながら、發句すべきわざにもあらねど、よのつね此道を心に懸めて、年もやゝ半百に過ぎたれば、いねては朝雲暮烟の間をかけり、さめては山水野鳥の聲におどろく。是を佛の妄執といきしめ給へる、たゞちに今の身の上に覺え侍るなり。此後はたゞ生前の俳諧をわすれむとのみ思ふは。と、かへす〳〵くやみ申されし也。さばかりの叟の辭世は、などなかりけると思ふ人も世にはあるべし。

九日

服用の後支考にむきて、此事は去來にも語りおきけるが、此度嵯峨にてし侍る大井川の發句、覺え侍るかと申されしを、あと答へて、

大井川浪に塵なし夏の月

と吟じ申しければ、その句國女が白菊の塵にまぎらはし。是もなき跡の妄執とおもへばなしかへ侍るとて

清瀧や波にちり込青松葉

十日

夜ふけ人いねて後、誰かれの人々枕の左右に侍りて、此後の風雅はいかになり行き侍らむと尋ねけるに、されば此道の吾に出でゝ後、三十餘年にして百變百化す。しかれどもそのさかひ眞行草の三をはなれず。その三が中にいまだ一二をもつくさゞるよし辱を打うるほし〳〵やゝ談じ申されければ、やすからぬ道の神なりと思はれて袖をぬらす人殊に多し。

十一日

此暮相に晋子幸に來りて、今夜の伽にくはゝりはるも、いとちぎり深き事なるべし。その夜も明るほどに、木節をさとして申されけるは、吾生死も明暮にせまりぬと覺ゆれば、もとより水宿雲棲の身の、この藥かの藥とてあさましう、あがきはつべきにもあらず。たゞ願はくは老子が藥にて最期までの辱をぬらし候はむ。と深く頼みおきて、此後は左右の人をしりぞけて、不淨を浴し、香を焼て後安臥してものいはず。

(一)十日『夜ふけ人いねて後』の前の『記事』の前に、遺書遺物の事あれど省略す

十二日

されば此叟のやみつき申されしより、飲食は明暮をたがへ給はぬに、きのふ十一日の朝より今宵をかけてかきたへぬれば、名殘も此日かぎりならんと、人々は次の間に居並みて、なにとわきまへたる事も侍らず也。午の時ばかりに、目のさめたるやうに見渡し給へるを、心得て粥の事すゝめければ、助けおこされて辱をぬらし給へり。その日は小春の空の立歸りてあたゝかなれば、障子に蠅のあつまり居けるをにくみて、鳥もちを竹にぬりてかりありくに、上手と下手のあるを見て、をかしがり申されしが、その後はたゞ何事もいはずなりて、臨終申されけるに誰も〳〵茫然として終の別とは今だに思はぬ也。(下略)

(二)遺物に就ては諸書の記載區々なり。しばらく『花屋日記』の記事を抄出す

遺物の品々　(花屋日記)

御(一)遺物

一、出山佛一體　御長一寸一分
一、鐵如意一本　佛頂禪師より附與。長さ押延て凡一尺九寸位。頭蔦葉形。金箔。木曾寺に在り。丈艸に附與。
一、觀音經　小本一部
一、紙裸袈裟　佛頂禪師より附與。
一、被　風
一、銅　鉢　一口
一、木　硯　樫木にて旅硯なり
一、古今集序註　一部
一、百人一首　一部
一、新　式　一部
一、奥之細道　一部
一、御　笠　一蓋
一、菅　蓑　一被
一、御　杖　一本

右紙裸袈裟より以下七品は、衆て惟然に御

附與の御約諾のよしに候故、直に惟然に附與。

一御頭陀　一

中に杜子美詩集、山家集、外に後猿みのと題あり、歌仙三卷、發句四五吟ほど、外は御書捨の反故など入る。別に紙に包たる布裂五寸に六寸許、上包に『狹の細布』とあり。進上清風と。又外に和歌の古短冊二枚。松島蚶潟の繪二枚。

右の內紙に包たる五寸に六寸の布裂、並松島蚶潟の畫、もし御支無御座候はば、御形見に下拙に被仰付可被下樣奉希候。生涯寶物に仕度候。

去來

(一)烏羽文臺　一脚。黑塗。

長一尺九寸。幅一尺二寸。高四寸。板厚三分。

筆反一尺一寸。

但三ケ所瑕　二ケ所は小指先ほど。一ケ所は小き摺れ。四方の角損じあり。

(一)「花屋日記」所收の去來と芭蕉の兄なる松尾半左衞門との往復書簡によれば、此文臺は玄旨法印、紹巴、貞室、季吟、芭蕉、傳德、貞徳はしたるものにて、猿蓑の一撰集成稿の時、深川より取寄せて、拔ひしも誇に用ひしなり。この文臺は今、肥後八代の正數寺へ花屋の日記筆者文晩の寺なりと、現住輪廻井雨堂氏の曾て一しがらみ草紙に發表せる事あり。

發句集追加

老こむる葎の友や冬菜賣

「栢莚日記」(二代目團十郎の日記)元文五年七月十三日の條に桃青の此句の懸物を代金二朱にて求めたる旨記しありと。

索引

發句、連句、歌、其他の韻文を檢索する爲の索引なり。他の檢索卽ち書名、文章等のは各集の目次によるべし。

この索引は發音順なり。

【あ】

於春々……（三）
あか〳〵と……（二九）
同……（三九四）
同の連句……（二二六）
『曉や雪を』の連句……（三三四）
『赤人も今一しほ』の附句……（二四一）
秋を繰て……（一四）
秋風に折れて……（四四）
同……（四二三）
『秋風に吹かれて』の連句……（三〇九）
秋風の吹けども……（三七）
同……（五五二）
秋風のやり戸の……（七）
秋風や伊勢の……（三一）
秋風や桐に……（三九）
秋風や藪も……（一二）
同……（三六八）
秋來にけり耳を……（二）
秋來ぬと妻……（七）
秋さびし手毎に……（二九）
秋すゞし手毎に……（同）
同……（三九四）
『秋立て干瓜』の連句……（三三四）
秋近き心の……（四六）
同の連句……（二〇一）
秋十とせ……（九）
同……（三六六）
秋に添うて……（四二）
秋のいろ……（三九）
同……（四四七）
同……（五二〇）
秋の暮客か……（四二）
『秋の暮行先々の』の連句……（三三五）
秋の野や草の……（四二）
秋の夜を……（四八）
同……（四五九）
同の連句……（三一）
秋ふかき隣は……（四八）
秋もはやはらつく……（同）
同……（五五三）
同の連句……（三一〇）
秋や須磨……（八）
『灰汁桶の』の連句……（三三五）
『飽や今年』の連句……（二五九）
曙や白魚……（二）
同……（三六九）
同……（五五一）
曙はまだ……（四九）
明行くや廿七夜……（同）
あこくその心は……（一四）
同……（一九）
朝顔の花に……（五三七）
朝顔に我は……（五〇）
同……（四）
朝顔や是も……（四二八）
朝顔や書は……（四三）
同……（四二）
同……（四二九）
『朝顔や夜は』の連句……（五四七）
朝顔は酒もり……（二七七）
同……（二四）
朝顔は下手の……（四三）
朝寒もたれ……（一七）
『淺茅生』の附句……（二五）
朝茶のむ……（四九九）
朝露によごれて……（五一）
同……（四六）
朝な〳〵手習……（五五三）
『朝日さす』の附句……（五一）

あきむづや……（三〇）
朝よさをたれ……（二五）
同……（五三）
足洗てつい……（五〇）
あすは粽……（五二）
紫陽花や帷子……（四九）
紫陽花や藪を……（四五）
同の連句……（二九二）
東路の毛ずね……（四六）
汗の香に……（三六）
汗水やよし野……（八）
遊び來ぬ……（二）
あち東風や……（一）
暑き日を……（二八）
同……（三九二）
あつみ山吹浦……（二八）
あつみ山や吹浦……（同）
同……（三九二）
同の連句……（二三）
『あな藏』の附句……（九九）
あなむざんやな……（二九）
同の連句……（三八）
あの雲は……（三〇）
あの中に……（二四）
同……（三八）
近江蚊屋……（五二）
海士が家は……（四九二）
海士の顔……（二）
同……（三七八）
蜑の屋は……（三八）
あみざこを（歌）……（三六〇）
雨折々……（一七）
江鮭ありもや……（五〇）
雨の日や世間の……（二）
雨の矢に蓮……（四九）
『雨はれて栗の』の連句……（二〇四）
あやめ生り……（三）
あやめ草足に……（一七）
同……（三八七）
鮎の子の白魚……（二六）
荒海や……（二九）
同……（三九三）
同……（四〇九）
同……（四一〇）
あらかねの土……（一六）
あらし山藪の……（三六）
同……（三九七）
あらたふと青葉……（二六）
同……（三八二）
あら何ともな……（三）
あら何ともなや……（同）
同の連句……（二〇四）
『霰かと聞くほど』の連句……（一八）
霰聞くや此身は……（五）
霰せよ網代の……（三二）
あられまじる……（一）
有蘭き委……（二四）
有蘭やいたゞいて……（四二）
有蘭や雪をかをらす……（二八）
同……（三九〇）
有蘭や雪をめぐらす……（二八）
同の連句……（二二〇）
有明も三十日に……（四四）
同……（五四五）
『有明の』の附句……（九五）
『あれ〳〵て末は』の連句……（三〇三）
粟稗に……（二三）
同の連句……（一九一）
同……（四一）
青くても……（二六一）
同の連句……（二六一）
青ざしや……（五）
青葉して御目の……（二二）
同……（三八二）
あら何ともな……（三）
あら何ともなや……（同）
同の連句……（二〇四）
『霰かと聞くほど』の連句……（一八）
霰聞くや此身は……（五）
霰せよ網代の……（三二）
あられまじる……（一）
有蘭き委……（二四）
有蘭やいたゞいて……（四二）
有蘭や雪をかをらす……（二八）
同……（三九〇）
有蘭や雪をめぐらす……（二八）
同の連句……（二二〇）
有明も三十日に……（四四）
同……（五四五）
『有明の』の附句……（九五）
『あれ〳〵て末は』の連句……（三〇三）
粟稗に……（二三）
同の連句……（一九一）
同……（四一）
青くても……（二六一）
同の連句……（二六一）
青ざしや……（五）
青葉して御目の……（二二）
『青葉より紅葉』の連句……（二九）
青柳の泥に……（四五）

【い】

飯貝や……（二三）
家はみな……（四七）
庵の秋ぬかみそ……（三九）
鳥賊寶の……（四五）
『いかに見よと』の連句……（一五二）
いかめしき……（三二）
生きながら……（二五）
同の連句……（二五）
いく秋の……（二五）
『いく落葉それほど』の連句……（一七）
幾霜に心……（一四）
幾千里へだつ……（七）
池水に蛙……（一四）
いざ出でむ……（一八）
いざ子ども走り……（三二）
同の連句……（三二三）
いざさらば……（一八）
同の連句……（一八三）
いざともに穂麥……（一三）
『勇み立つ鷹引居るあらし哉』の連句……（二八六）
……（四四）
『勇み立つ鷹引居るあられ哉』……（四四）
同の連句……（二八五）
いざ行かむ……（一八）
同……（三五五）
いざよひのいづれか……（一四）
いざよひもまだ……（二四）
同……（二八二）
同……（四二八）
いざよひや海老……（二八）
いざよひはとりわけ……（四三）
同の連句……（二七九）
いざよひは僅に……（四三）
いさり火に……（三〇）
石かれて水……（八）
『石ぶし』の附句……（三二五）
石山の石よ……（一九）
同……（三九四）
石の香や……（二六）
『衣裝して梅』の連句……（二〇〇）
いづく時雨……（七）
伊勢が寶……（一四）
伊勢に居て……（四八）
頂いて落穂……（三四）
市人にいで……（一二）
同……（五五六）
同の連句……（一五二）
市人よ……（一二）
同……（三六九）
『市中は物の』の連句……（二三二）
一家みな……（四七）
一休が土器……（八）
いつしかに（歌）……（三五九）
五つ六つ茶の子に……（五一）
一疋のはね馬……（一五）
偽の舌に……（八）
凍解て……（二）
いでや我よき衣……（五）
いでや我よき布……（同）
絲櫻こや……（一）
『いと涼しき』の連句……（九六）
絲遊に結び……（二六）
稻雀茶の木……（三四）
稻妻にさとらぬ……（三八）
『稻妻に額』の連句……（三〇二）
稻妻を手にとる……（一五）
同……（五四八）

稲妻や海の面……（三八）
稲妻や額の……（四七）
稲妻や闇の……（同）
同……（四八）
戌と申の……（一）
稲こきの姿も……（三九）
猪の（歌）……（三六〇）
猪の床にも……（四七）
蕗もともに……（一五）
同……（四三一）
命ふたつ中に……（一三）
命ふたつの……（同）
同……（三七〇）
命なりわづかの……（三）
『祈るしるし』の附句……（三二五）
『いぼ一つ愛に』の連句……（二三五）
『今をたうけ』の附句……（九五）
芋洗ふ女……（一〇）
同……（三六七）
芋掘るて……（三六六）
芋の葉や……（一七）
同……（三七二）
『芋ほりかへす』の附句……（三二四）
入相の鐘も……（二六）
入りかゝる日も……（四九）
入口は柳に……（四七）
入月のあと……（四八）
同……（四四）
『いろ〳〵の菊も』の連句……（四三一）
『いろ〳〵の名も』の連句……（一九二）
色付くや豆腐に……（三三）
同の連句……（三）
岩つゝじ染る……（一五）
【う】
植うる事……（二）
魚鳥の心は……（四〇）
うか〳〵と……（一六）
うかれけり人や……（一）
うき人の旅にも……（四三）
同……（四二一）
うきふしや……（三六）
同……（三六七）
うき我をさびし……（三六）
同……（三六八）
『黄鳥に朝日』の連句……（二九一）
鶯に感ある……（三六）
鶯の笠……（三一）
同の連句……（三七）
鶯や竹の子……（四五）
同……（五八六）
鶯や茶袋……（一四）
鶯や餅に……（四一）
同……（四五〇）
同……（同）
同の連句……（二五五）
鶯や柳の……（四一）
鶯を魂に……（五）
牛部屋に蚊の……（三七）
同の連句……（二四六）
『牛流す村の』の連句……（二九五）
宇治山やとざま……（二）
『うしろ風寓の』の連句……（二六八）
埋火も消ゆや……（二五）
埋火や壁には……（四四）
うたがふなうしほの……（三三）
歌よみの先達……（二六）
『打提る』の附句……（三二五）
打よりて花入……（四三）
同……（五八六）
同の連句……（二六八）
團扇とって……（一三）
團扇もて……（同）
同……（四三一）
同……（四三〇）
美しき其姫ゆり……（七）
『うねめ』の附句……（三二五）
卯の花も母なき……（一七）
同の連句……（一六九）
卯の花やくらき……（四五）
姥櫻さくら……（一）
馬かたはしらじ……（四〇）
同……（四四八）
『馬かりて燕』の連句……（二三〇）
馬に寝て……（一〇）
同……（三六七）
同……（五四六）
馬ほく〳〵……（一〇）
同……（四二四）
馬ぼく〳〵……（一〇）
馬士に落さるゝ……（四四）
同……（四五二）
馬をさへ……（一二）
同……（三六九）
同の連句……（一四五）
『梅たえて日永し』の連句……（一五五）
梅咲てよろこぶ……（四八）
梅咲くやしらゝ……（五）
同……（三六九）
同……（四三一）
同の連句……（一四五）
海にふる……（一九）
海ははれて……（六）
梅白し……（一二）
同……（四五）
同の連句……（一五四）
梅折て椿に……（一六）
梅が香に洞ひ……（一三）
梅が香にのつと……（四五）
同……（五五一）
同の連句……（二九〇）
梅が香にむかしの……（四八）
同……（四四九）
梅が香やしらゝ……（五）
『梅が香や通り』の連句……（二七二）
梅懸て……（一三）
同……（三七〇）
梅咲くや白の……（四五〇）
『梅たえて日永し』の連句……（一五五）
梅咲てよろこぶ……（四八）
梅咲くやしらゝ……（五）
梅椿早咲……（四〇）
『梅の風俳諧國』の連句……（一〇二）
梅の水に猶……（一〇）
同……（三七六）
同……（四三四）
梅干にかよふ……（一六）
梅柳さぞ……（四）
梅柳わたすか……（四二）
梅わか菜……（三五）
同……（五四七）
同の連句……（二四二）
又……（二四三）
うらやまし浮世の……（三六）
瓜つくる君が……（五〇）
瓜の皮むいた……（四六）
『瓜の中ど』の附句……（二二）
瓜の花雫……（一四）
『漆せぬ琴や』の連句……（二六〇）
『うるはしき稲』の連句……（二四七）
【え】
叡嶽にて……（四八）
『夷の聲』の附句……（一五三）
夷子講酢賣に……（四〇）

枝ぶりの日に〳〵……（三一）
枝なくて……（二三）
枝もろし……（五二）
『江戸さくら心』の連句……（一七一）
煙方から曳くや……（五五）
榎の實ちる……（四三）
艷なるやつこ……（九）

【お】

老の名の……（四三）
同……（四三八）
笈も太刀も……（二七）
同……（三八六）
大井川浪に……（四六）
同……（五八八）
大風のあしたも……（三九）
狼も一夜は……（一七）
扇にて酒……（二一）
同……（三七七）
大津繪の……（三五）
同……（四四三）
『大津奈良屋』の附句……（一三三）
大比叡や……（三）
『大宮』の附句……（一三三）
大雪や婆々……（三四）
起上る菊……（一八）
『蜀炭や更に』の連句……（一七七）
荻の聲こや……（七）
荻の穂や……（三八）
『起臥の麻に』の連句……（二〇八）
起きよ〳〵……（一六）
『おく底もなくて』の連句……（二五三）
送られつ送りつ……（二四）
同……（三八一）
『送り膳』の附句……（二四）
御子良子の……（二〇）
同……（三六六）
同……（五四八）
をさな名や……（五一）
遲き日にかわかぬ……（八）
『お尋の我宿』の連句……（二〇六）
『おだ卷』の附句……（九五）
落來るやたかく……（一六）
同の連句……（二〇三）
落ちざまに水……（四九）
落葉してぬかみそ……（三九）
同……（四四九）
折々に伊吹を……（三九）
折ふしは酢に……（五一）
おとろへや商に……（同）
己が火を木々の……（三七）
小野炭や……（八）
姨石と……（八）
老こむる菲や……（五九〇）
御命講や……（二五）
重々と名刀……（七）
同の連句……（二七八）
『おもひ立木曾や』の連句……（一五八）
思出す木曾や……（一三）
思ふこと（歌）……（三五九）
俤や姨……（二四）
同……（三八一）
同……（五三八）
俤は姨……（二四）
おもしろうて……（二三）
同……（四〇八）
おもしろき秋の……（四八）
面白し雪にや……（一九）
同の連句……（一七七）
阿蘭陀も……（三）
同……（四一七）
折々に伊吹を……（三九）
折ふしは酢に……（五一）

『折々や雨戸に』の連句……（三〇三）

【か】

只よする……（八）
蛙子は日すり……（四九）
かゝさぬぞ……（五〇）
かゞり火にかじかや……（三〇）
蕊子花かたるも……（二三）
同……（三七八）
同の連句……（一八五）
かきつばた似たりや……（一）
杜若われに……（一三）
『燕子花我に』の連句……（一八六）
鰐よりも……（一六）
鰐よりは……（同）
かくさぬぞ……（五〇）
かくれ家や月と……（三一）
かくれ家や日立ぬ……（二七）
同の連句……（二〇五）
かくれけり師走の……（三五）
景清も……（一〇）
かけて置く……（五〇）
棧や命を……（二四）
同……（三八一）
棧やまゞ……（二四）
同……（三八一）
影まちや……（四四）
『陽炎いさむ』の臨……（五五五）
陽炎に俤……（一〇）
同……（五五一）
陽炎の我肩に……（一五）
同の連句……（二〇一）
陽炎や柴胡の……（三三）
影は天の……（一）
笠寺や……（一三）
『笠寺や乘散』の連句……（三一三）
かさゝして（歌）……（三六〇）
笠鳥や……（二七）
笠鳥は……（同）
同……（三八六）
笠の緒に……（四八）
同……（四六七）
笠の緒や……（九）
かさもなき我を……（五一）
『飾竹』の附句……（九八）
樫木の……（一三）
同……（三六九）
同の連句……（二四）
數ならぬ身とな……（四七）
霞やら花の……（四九）
風色や……（四七）
同……（五四九）
風かをる羽織……（三七）
風の香も……（一八）
同の連句……（二〇七）
風吹ば……（二）
かぞへ來ぬ……（四一）
蝸牛角……（三）
同……（五四六）
『雉子は日々に』の連句……（二五九）
語られぬ……（一八）
同……（三九二）
勝角力いつも……（四二）
歩行ならば……（一九）
同……（三七五）
同……（五五六）
同の連句……（一八三）
被ふす……（一六）
桂男すます……（二）
かつを賣……（一五）
『門しめて』の附句……（三五五）
門松や思へば……（二）

悲まむや……（九）
『蚊にさゝれ』の附句……（一三）
香に匂へ……（一九）
鐘きえて花の……（四九）
鐘つかぬ……（四三）
『鐘にて』の附句……（九九）
夏馬の遅行……（一〇）
同の連句……（一四一）
夏馬ほく〳〵……（一〇）
かびたんも……（五）
壁土の家する……（四八）
鎌倉を生きて……（四一）
喰當る身の……（同）
神垣や……（一二）
同……（三七六）
紙ぎぬの……（一三）
同の連句……（一八四）
紙子にも霜や……（五一）
髪はえて……（一五）
瓶わるゝ夜の……（四四）
かよひにし（歌）……（三五九）
鎌倉は生きて……（四一）
から〳〵と折ふし……（五一）
傘に押分け……（四三）
同の連句……（一三一）
辛崎の……（一三）
同……（三七〇）
同……（四三〇）
同……（四八四）
同の連句……（一五五）
から鮭も……（三五）
同……（三六〇）
同……（五五〇）
乾鮭や何菜……（九）
唐破風の……（一五）
かり跡や物に……（五一）
苅あとや早稲……（一〇）
苅かけし……（一四）
同……（三七二）
『雁がねも靜に』の連句……（一九四）
『苅株も水田の上の』の連句……（一六二）
雁さわぐ……（五二）
かりて寝む案山子の……（三九）
雁の聲寂寞……（五一）
同……（三六一）
『苅やうを又ならひけり』の連句……（一〇四）
枯枝に鳥の……（三）
同……（五四七）
同の連句……（一四三）
かれ芝や……（一九）
同……（三七五）
獺のまつり……（三三）
川風やうす柿……（三七）
同……（四四六）
同……（五五〇）
川風やよい茶……（一五）
川上とこの……（四三）
『土器くさき』の附句……（一四一）
香を探る……（一九）
同……（三七五）
顔に似ぬ……（一三）
同……（四五四）
鋭に似ぬ……（五五三）
香を殘す闘帳……（七）
『寒菊の隣もありや』の連句……（一六三）
寒菊や粉糠……（四四）
同の連句……（一八三）
元日に田毎の……（一三四）
元日や猿に……（四二）
元日や思へば……（九）
親骨の蠻……（一五）
同……（五四六）

灌佛や纖手……（四五）
灌佛の……（三）
同……（三七八）

『き』

菊に出て奈良と……（四七）
同……（四五九）
菊の香にくらがり……（四七）
菊の香や奈良は……（同）
同……（四五八）
菊の香や奈良には……（四七）
同……（四五八）
菊の香や庭に……（四四）
同……（四三八）
菊鶏頭……（五一）
菊の露落ちて……（三二）
菊の後大根の……（三九）
菊の花咲くや……（四四）
衆湯や雨に……（二八）
同……（三九三）
『きざはしや』の連句……（三三七）
木曾の情……（四二）
木曾の檬……（二四）
同……（三八一）
木曾の痩も……（二四）
木啄の柱を……（五〇）
木啄も庵は……（二六）
同……（三八四）
きても見よ……（二）
同……（三二二）
『君にもたれて』の附句……（五四）
砧うつて……（二）
同……（三六八）
同……（五四七）
木陰に蟬……（七）
氣のつかぬ……（四九）
昨日からちよい〳〵……（四八）
きのふからちよつ〳〵と……（五五三）
『きのふけふ』の附句……（三二五）
木まくらの油……（四〇）
君火たけ……（一五）
君火をたけ……（同）
『君も臣も』の連句……（九五）
君や蝶……（六）
清く聞かむ……（五）
兄弟のくすし……（四〇）
清瀧の水汲み……（五〇）
清瀧や浪に……（四六）
同……（三八一）
『狂句木枯』の連句……（一四七）
京に飽て……（四〇）
京にても京……（三六）
同……（四四六）
けふの今宵……（二）
『脚布』の附句……（二二）
けふばかり人も……（四二）
同の連句……（二六三）
けふ被岸……（九）
京まではまだ……（一八）
同……（三七四）
同の連句……（一七四）
今日よりや……（一三〇）
同……（三九五）
今日よりは……（三〇）
京は九萬九千……（六）
桐動く秋の……（三九）
きり〳〵すわすれ音に……（一四）
霧雨の空を……（三七）
霧時雨……（一〇）
同……（三六八）
桐の木に……（一四）
同……（五五三）
勢ひあり……（五）

木を伐て……（二）
義を守ること……（三六〇）
金屏に……（三二）
同……（四五三）
金屏の……（三二）
同……（四三八）

【く】

愚案ずるに……（七）
水鶏なくと……（四六）
同の連句……（二九四）
草いろ〳〵おの〳〵……（四一）
草の戸に茶を……（四）
草の戸の月や……（三八）
草の戸も……（二六）
同……（三八二）
草の戸や……（三四）
同の連句……（二五二）
草の戸を……（三四）
草の葉を落つる……（三三）
草の家も……（二六）
同……（四五一）
草枕犬も……（二二）
同……（三六九）
草枕まことの……（四九）
葛の葉の……（三九）
藥のむ……（一九）
同……（五三〇）
同の連句……（一八三）
草臥て……（二二）
同……（二七六）
同……（四八四）
口切に堺の……（三五）
同……（四四五）
同の連句……（二六六）
口すべれ……（六）
愚にくらく……（四）
熊坂が……（二九）
『雲井』の附句……（二六）
雲折々……（二四四）
雲霧の……（一四）
雲とへだつ……（五〇）
蜘何と音を……（二）
雲の峯いくつ……（七）
……（二八）
雲を根に……（三九二）
鞍壺に……（二）
同……（四四）
同……（五四九）
『藏のかげ』の連句……（一八七）
くりからや三度……（二九）
『栗野老』の連句……（一四三）
暮遅き……（一四）
くれ〳〵て餅を……（二二）
黒森を……（九）
黒燒釜……（六）
椹の實や……（五）

【け】

鶏頭や雁の……（四三）
毫につゝみて……（四四）
同……（五六九）
今朝の雪……（四）
清炭に薪……（四）
實にや月……（三）
同の連句……（二二）

【こ】

犀澄みて……（五一）
犀にみな鳴き……（五〇）
犀よくばうたはう……（四九）
犀よくばうたはむ……（同）
口上に書きおとし……（二五）
同……（四六九）
鶴の巣も……（一三）
鶴の巣に……（二六）
紅梅や見ぬ……（一三）
蝙蝠も出でよ……（四九）
氷苦く……（五）
木がくれて茶摘……（四五）
同……（四五六）
木がらしに岩……（四〇）
『木がらしにうめる』の連句……（二六七）
『木がらしに手を當て』の連句……（二五二）
木枯ににほひや……（三九）
『木枯や寒さ』の連句……（一七九）
木枯の身は……（一二）
同……（三六九）
同の連句……（一四七）
木枯や竹に……（一四）
木枯や頬はれ……（三四）
『小契情行きて』の連句……（二七〇）
後家の秋……（七）
九重の（歌）……（三六〇）
九度起きても……（三九）
『爰もと』の附句……（二二四）
こゝも三河……（六）
棺よりあだに……（三）
湖水より……（五一）
同の連句……（三三三）
去年はは……（六）
小鯛さす……（二八）
胡蝶にも……（三一）
同の連句……（三三）
こちらむけ……（三四）
同……（四一〇）
子供等よ梅……（一六）
子ども等よ雲……（四一）
琴箱や古もの……（三九）
『琴おふて』の附句……（一五四）
子に飽くと……（五一）
『五人扶持』の連句……（二七二）
この秋は何で……（四八）
同……（五五二）
この秋は何に……（四八）
此あたり……（三三）
同……（四〇八）
此海に草鞋……（三）
同の連句……（一四五）
この海に牛も……（二）
同の連句……（九九）
『此界』の附句……（二二四）
『菊の工夫』の附句……（一五二）
此心察せよ……（三六）
此心推せよ……（同）
『此里は山を四面』の連句……（二五四）
此種と思ひ……（三三）
此槌のむかし……（二〇）
同……（四〇六）
この寺は庭……（四一）
この螢……（二四）
此程を花に……（二二）
この松の實ばえ……（一七）
同……（三七二）
此道や行く人……（四八）
同……（五五三）
同の連句……（三二二）
此道を行く人……（四八）
同……（四五九）
木のもとに汁も……（三三）
同の連句……（三二九）
又……（二三〇）
木のもとは汁も……（三三）

同……（五五〇）
此宿は水鶏も……（三七）
この山の悲しさ……（二〇）
同……（三七五）
小はぎ散れ……（三一）
御廟干とせ……（一一）
御廟年を經て……（同）
同……（三六八）
こまかなる……（三五）
米買ひに……（一五）
米くるゝ友を……（三八）
米のなき時は……（五〇）
蔵り居て……（三一）
蘭を着て……（三三）
同……（四三九）
今宵たれ……（四七）
今宵の月……（五三）
『是も又』の附句……（一三三）
これや世の……（三四）
子を背山……（七）
ごを焚て……（一八）
蒟蒻と柿と……（三四）
蒟蒻に……（二五）
同の連句……（一九九）
蒟蒻のさしみ……（四二）

【セ】

西行の庵も……（四三）
西行の草鞋も……（二四）
最中の桃の……（二〇）
盃に片破……（八）
盃に泥な……（一〇）
盃にみつの……（五一）
盃の下行く……（二）
盃や……（三）
さかりしや花に……（六）
さかりなる梅に……（一）
『鶯の足』の連句……（二八）
『鶯の足にかき出す』の附句……（四九七）
『咲花にちいさき』の附句……（四九八）
咲きみだす……（一〇）
櫻狩きどくや……（二一）
同……（三七七）
櫻より松は……（一七）
同……（三八七）
鮭馬の……（一七）
酒のみに……（二一）
同……（三七六）
酒のめば……（一六）
同……（四〇五）
さゝげたり……（三）
同の連句……（二四）
さゞ浪や風の……（四六）
笹の露……（四三）
さゞれ蟹足……（一七）
さし籠る莽の……（四〇）
さそへ雪……（八）
『さそな都』の連句……（一〇七）
さそ野分……（八）
坐頭かと……（一五）
里の子よ……（一六）
里の子等……（同）
里ふかく……（四七）
里ふりて……（同）
早苗つかむ……（一七）
同……（四〇九）
早苗とる……（一七）
同……（三六六）
同……（四〇九）
早苗にも……（一七）
『さびしさの底』の連句……（二五九）
さびしさや釘に……（一七）
寂しさや須磨に……（三一）
同……（三九六）
さびしさや花の……（二二）
淋しさよ右も……（一五）
淋しさを問うて……（四二）
樣々の事……（二二）
同……（三七六）
同の連句……（八三）
五月雨に御物遠や……（二二）
五月雨に岩檜葉……（七）
五月雨にかくれぬ……（二三）
五月雨に鳥の……（一七）
さみだれに寒い……（一〇）
さみだれにふり……（四三六）
五月雨の雲……（四五）
五月雨の降り……（二八）
同……（三九〇）
五月雨も濁ぶみ……（二）
五月雨や蠶……（四一）
同……（五八六）
五月雨やこの笠もり……（六）
五月雨や色紙……（三七）
同……（四〇〇）
五月雨や龍燈……（三）
五月雨は濁……（一七）
五月雨をあつめて……（八八）
同……（三九一）
同の連句……（一〇九）
寒からぬ露や……（四五）
『寒き燈』の附句……（一五四）
寒けれど……（一七）
同……（三四七）
『紗綾りんず』の附句……（二四）
更科や三夜さ……（二四）
『更科』の附句……（一五四）
さらでさへ秋よ……（同）
皿鉢も……（五〇）
『さりとては』の附句……（九九）
猿引は猿の……（三八）
『猿みのに』の連句……（二〇八）
猿をきく人……（一〇）
同……（三六七）
さればこそ……（一七）
三尺の山も……（三四）
三十里尾張……（三九）
同……（四四九）
殘暑暫く……（三一）
殘暑しばし……（同）
『殘暑暫』の連句……（二七）

【し】

『詩あきんど』の連句……（一四〇）
椎の花の……（四三）
同……（四二）
鹿の角まづ……（三二）
同……（三七二）
時雨るゝや……（三四）
『時雨〳〵』の連句……（一七二）
『時雨てや』の連句……（三八）
しぐれ行くや……（五一）
時雨をや……（一）
祖父と親……（三九）
しづかさや岩に……（一八）
同……（三九一）
しづかさや繪かゝる……（三九）
同……（四四七）
賤の子や……（一七）
同……（三七二）
『時節さぞ』の連句……（一四三）
死もせぬ……（一一）
同……（三六九）
『師の櫻』の連句……（一五二）
『篠の露』の連句……（三七八）

しのぶさ〳〵……（二）
同……（三六九）
同の連句……（二四五）
しばしの間も……（一）
柴付けし……（四六）
柴の戸の月や……（三八）
しばらくは瀧に……（二六）
同……（三八三）
しばらくは花の……（二）
渋柿や……（五一）
四方より花……（三三）
同……（四一）
鳥々や千々に……（二七）
清水ほど海の……（四三）
霜枯に咲くは……（一）
『霜月や』の連句……（五一）
『霜に今ゆくや』の連句……（三三六）
霜の後……（三四）
『霜の宿の』の連句……（五二）
霜をきて……（四）
霜を踏んで……（一六）
秋海棠四瓜の……（五）
『十三夜晩』の連句……（三八〇）
銷明けて月……（三八）
同……（四二六）
同……（同）
『しゃかの鐘』の附句……（九五）
正月も美濃と……（二五）
少將の尼の……（三五）
『菖蒲のかつら』の附句……（二三）
丈六に……（二〇）
同……（三七五）
同……（四〇七）
同……（五五一）
白魚に價ある……（六）
白魚や黒き……（四一）
白髪ぬく……（三四）
同の連句……（三三六）
『しら菊に高き』の連句……（九三）
白菊の目に……（四八）
同の連句……（三二）
白芥子に……（一三）
同……（三四〇）
白芥子や……（一〇）
白炭や彼浦島……（三）
白露のさびしき……（三一）
同……（五七七）
白露もこぼさぬ……（三七）
同……（四四七）
同……（同）
白露をこぼさぬ……（三七）
『尻』の附句……（三二五）
『しるべして』の連句……（二八七）
城あとや古井……（二三）
『しろがねに』の連句……（一七三）
『師走』の附句……（三二五）
汐越や鶴はぎ……（二八）
同……（三九三）
しほ尻の……（六）
鹽鯛の……（四二）
同……（四五三）
同……（五四九）
鹽にして……（三）
鹽にしても……（同）
同の連句……（二二〇）
汐やかぬ須磨よ……（八）
しほらしき……（二九）
同……（三九四）
同の連句……（二七）
しをれふすや……（一）
新麥や竹の子……（四三）
『新麥はわざと』の連句……（二九三）
新藁の……（五一）

【す】

水學も……（二）
水仙や白き……（三九）
同の連句……（二五三）
『水仙は見るまを』の連句……（二四一）
頭巾着た……（四四）
すくみ行くや……（一八）
『薄原龍の』の連句……（三六）
『涼しさの凝』の連句……（一五八）
すゞしさの指圖……（四五五）
すゞしさや海に……（三〇）
『涼しさや海へ』の連句……（二二三）
涼しさや直に……（四六）
涼しさやほの……（二八）
同……（三九二）
涼しさは指圖に……（四六）
涼しさは飛驒の……（同）
涼しさを繪に……（四六）
涼しさを飛驒……（四五五）
涼しさをわが……（二八）
同……（三九〇）
同の連句……（二〇七）
煤掃は己が……（四四）
煤掃は杉の……（四〇）
すゝはきや暮ゆく……（五二）
煤ぼりてごみ……（四八）
雀子と聲……（二六）
硯洗ふ……（二二）
硯かと拾ふや……（一〇）
硯好む奈良の……（一六）
裾山や虹……（三六）
捨てぬまに（歌）……（三五九）
すてはてゝ（同）……（二六〇）
捨物に……（一二）
『須磨ぞ秋』の連句……（一三）
須磨寺に……（一三）
須磨寺や……（三七七）
同……（一二）
須磨の蜃……（四五三）
同……（三九九）
須磨の浦の……（四一）
『炭賣の』の連句……（一五〇）
住みつかぬ旅の……（二四）
李青く竹笠……（七）
駿河路や花橘も……（四五）
關守の宿を……（二七）
せつかれて年忘れ……（四二）
節季候の……（三五）
同……（五四七）
節季候を……（四〇）
芹燒やすそ輪の……（四四）
同……（五四八）
同の連句……（二八〇）
『洗足に』の連句……（二六五）

【せ】

僧朝顔……（一）
同……（三六八）
蒼海の……（三）
雜炊に毛巻……（四四）
同……（四五三）
草履の尻……（三）
袖の色よどれて……（四〇）
袖よどすらむ……（九）
『その鬼』の附句……（二二四）
そのかたち……（二五）
同の連句……（一九五）
その玉を羽黑……（三〇）
そのにほひ桃より……（四〇）

同の連句……（二五三）
『其不二や』の連句……（二五八）
そのまゝに月も……（三一）
蕎麥はまだ……（四七）
『空豆の花』の連句……（二七五）
『それ人間』の附句……（二三）

【た】

田一枚……（二七）
同……（三八五）
橙や伊勢の……（三一）
松明に醉ふ歟……（七）
内裸蟲……（三）
たかうなや……（二）
鷹一つ……（一八）
同……（三四四）
誕生ぞ……（一二）
同……（三六九）
同……（五五）
蟾の目の……（三八）
高水に星も……（四三）
同……（四二）
同……（五四五）
茸狩や……（三一）
竹の子や……（口絵）
同……（三六）
同……（三六九）
『竹弓』の附句……（九五）
鉢盧や……（二三）
同……（三七九）
たゞ一夜桃に……（三五）
橘やいつの……（四九）
七夕のあはぬ心……（一）
七夕や秋を……（四六）
同……（三五二）
七夕や裸硯……（四一）
谷の奥氷室……（二八）
種芋や花のさかり……（二三）
同の連句……（三八）
たのむぞよ寒酒……（四二）
旅がらす古巣……（二三）
旅鳥二百十日も……（一七）
旅蟬や……（二三）
『旅衣早苗に』の連句……（二〇四）
旅人と我名……（一八）
同……（三七三）
同……（五四九）
同の連句……（一七〇）

『旅人と我見はやさむ』の連句……（一八〇）
旅寢して……（一九）
同……（三七五）
旅に病て……（四八）
同……（五八七）
旅人の心にも……（四三）
旅寢よし……（一九）
同の連句……（一八二）
玉川の水に……（五〇）
魂まつりけふも……（三四）
手向けり芋は……（七）
ためつけて……（一八）
同……（三七五）
同の連句……（一七九）
田や蓼や……（二七）
誰人か蔦……（三二）
同……（四四〇）
同……（四四一）
誰やらが……（一六）
たわみては雪……（四四）
同……（四五二）
たんだすめ……（一）

【ち】

『中がへり』の附句……（二三）
茸摘んで……（六）
茸はまだ……（四五）
父母の……（二三）
同……（三七七）
地にたふれ……（四九）
粽結ふ……（三七）
同……（五四六）
『朝鮮』の附句……（一五四）
長嘯の墓も……（三二）
同……（四三九）
『長嘯の筆』の附句……（二三四）
蝶鳥のうはつき……（九）
蝶鳥のしらぬ……（五）
蝶の飛ぶばかり……（一三）
蝶の羽の……（四九）
蝶も來て酢を……（三九）
ちらば散れ……（六）
塵土佐の……（五一）
同……（四七）
ちる花や鳥も……（四三）
同……（五四六）
散る柳あるじも……（二九）
同……（五三一）
塚も動け……（二九）
同……（三九四）
月いづこ……（三一）
月影や四門……（二三）
同……（三八一）
撞鐘も……（二三）
『月暮るゝ』の附句……（九五）
月清し……（三〇）
同……（三九六）
月かげをこぼさぬ……（三七）
月さびて……（三）
月さびよ……（同）
月白き……（一四）
月ぞしるべ……（一）
月代や……（三八）
同の連句……（二五〇）
『月代をいそぐ』の連句……（二六四）
月の鏡……（一）
月花の愚に……（四二）
月花のこれや……（九）
同……（五三一）
月花もなくて……（二五）
『月花を』の連句……（二〇二）
月はやし……（一七）
同……（三九二）
月すむや狐……（四八）
月見する座に……（三八）
同……（四四六）
同の連句……（二五〇）
月雁見せよ玉江の……（三〇）
月見ても……（二二）
同……（三七八）
月に名を……（三〇）
月の雁……（五一）
同……（三六一）
『月出は行燈』の連句……（一九三）
月のみか雨に……（三二）
月待や……（三五）
月弓や……（七）
月やその……（一五）
同の連句……（二八八）
月雪とのさばり……（一六）
月はあれど……（二二）
同……（三七八）
月を見ても……（二二）
『つく〳〵と』の連句……（二五六）

作り木の庭を……（三九）
蔦植ゑて……（一一）
同……（三六七）
蔦の葉は……（一五）
鄙蹋生けて……（一三）
同……（三三〇）
『つゝみかねて』の連句……（一四九）
常にゝくむ……（四〇）
角髪や奥を……（七）
『つぶ〳〵と』の連句……（三〇四）
摘みけむや……（六）
露とく〳〵……（一一）
同……（三六八）
梅雨ばれの……（九）
鶏下りて……（一五）
鶏啼くやその聲……（五〇）
鶏の毛の……（四三）
同……（四二〇）
鶏の巣に……（二六）
鶏の巣も……（一三）
同……（四三〇）
同……（四三三）

【て】

庭訓の……（三）
『蔵に』の附句……（二三）
手にとらば……（一一）
同……（三六八）
同……（四〇四）
手の扇く……（五〇）
天秤や……（二）
手鼻かむ……（一九）
寺に寝て……（一七）
同……（三七二）
手をうてば……（三六）
同……（三九九）

【と】

遠浸や……（一四）
『唐朝』の附句……（一二三）
冬瓜や……（四七）
たうきびや……（三）
當歸より……（三三）
『冬景や』の連句……（一七三）
たふとさにみな……（四〇）
たふとさや……（四一七）
同……（三九）
鯨がる涙や……（三三）
同の連句……（二五二）
とふ人も（歌）……（三五九）
磨直す……（一八）
同……（三二四）
同の連句……（一七八）
『時は秋』の連句……（一六九）
床に來て……（五一）
『何處までも』の連句……（一八八）
年暮れぬ……（一三）
同……（三六九）
年立つや新年……（九）
『年立や家中』の連句……（二八九）
年々やさくらを……（三一）
年々や猿に……（四二）
同……（四四九）
同……（五六六）
年波や……（五五一）
年の市……（一五）
年の市……（一六）
としの夜の（歌）……（三五九）
年や人に……（五）
年忘三人……（一六）
『年忘れ妻』の連句……（一七〇）
土手の松花や……（三三）

戸の口に宿札……（六）
『寓の羽』の連句……（三七七）
ともかくも……（四〇）
鳥さしも笙や……（九）
鳥の文かた野の……（八）
『蜻蛉の壁』の連句……（一六七）
蜻蛉やとり付……（三一）
どんみりと樗や……（四五）

【な】

ながき日も……（一六）
ながき日を……（同）
詠るや江戸には……（二）
なき人の……（一三）
なけやなけ……（六）
『茄子の』の附句……（九）
『菜種ほす』の淹句……（三〇一）
夏かけて名月……（四三）
夏來ても……（三三）
夏草やつはもの……（一八）
同……（三六〇）
同……（三八九）
夏近し……（一）
納豆きる……（四一）
夏の月御油より……（三）
夏のむし……（五〇）
夏の夜や崩れて……（四六）
同の連句……（三〇〇）
夏の夜は木魂……（三六）
夏の夜や木魂……（三九九）
夏山に足駄……（一六）
同……（三七〇）
夏山や紙すく……（三六四）
夏山や杉に……（三三）
夏はあれど……（一五）
同……（四〇七）
撫子にかゝる……（三七）
撫子の髪さ……（二四）
七株の萩の……（四一）
何くうて小家は……（五一）
『何となく榮』の連句……（三一四）
何となく何やら……（一三）
何とはなしに……（同）
同の連句……（一五五）
何にこの……（三三）
同……（四三九）
同……（五四九）
『何の風情』の附句……（九五）
何事の見たて……（一三）
何事もまねき……（七）
何人か薦……（三三）
難波津や田螺の……（同）
何をこの……（同）
菜畑に……（一三）
同……（三七〇）
なまぐさし……（四三）
同……（五五一）
浪の花と……（一二）
浪の間や……（三一）
同……（三九六）
『南無や』の附句……（一三三）
南も佛……（一四）
『ならで通ふ』の附句……（九五）
奈良七重……（九）
槍山や……（一四）
なりにけり〳〵……（三）
猫見たし……（一二）
同……（三七六）
何の木の……（一〇）

同……（三四）
同……（三四）
同……（三四）
同の連句……（一六三）

【ま】

清水や……（四三）
西か東か……（一三）
『鉦とる鈴』の連句……（一四三）
西国巡るはれさや……（一三）
同……（四〇三）
『仁王』の附句……（一一三）
『三日月』の附句……（一四四）
同……（四一）
仏合しや茶碗……（九）
仏合しや立鈴……（四一）
乳房の下……（一六）
『女房』の附句……（一一四）
巻の座に……（一六）
巻物で門づるや……（一〇）
同……（三九三）
巻物で出でぬや……（一〇）
巻物ひて寄るや……（一一）
巻物に……（一四）
巻の座に……（一六）
巻物で門づるや……（一〇）
同……（三九三）
巻物で出でぬや……（一〇）
巻物ひて寄るや……（一一）

【む】

『我ばは』の連句……（一四）
『むけ初る』の附句……（一一六）
蚊人に……（一四）
むれて行く……（一六）
同の連句……（一一六）

【め】

巡り合く……（四一）
『鶯や』の連句……（一六）
雨の蟬……（四一）
雨の蓮……（一一）
雨降なき夜……（四一）
れたる蓮や……（一）
『梁でれこゝろ』の附句……（九）
子日しに……（一一）
『梅』の連句……（四一）
今蔵の木の……（一四）
『梅ばさまでの』の連句……（一一六）
梅は月に……（一）

【も】

『百あらし』の連句……（一四一）
花なしの……（一一）
同……（三九）
のられんの鼻……（一一）
のがれすむ(蓮)……（三九）
『蓮を蚊に』の連句……（一四一）
野ぞらしや……（一〇）
同……（三六）
『草間ぞや』の連句……（一一一）
『のまれけり』の連句……（一一六）
夜明けて……（一六）
夜風……（一六）
同……（三四〇）
焼芋汁の……（四九）
焼りたやと……（九）
『野は鈴に』の連句……（一一〇）
野を横に……（一一）
同……（三六四）

【や】

遊び田や……（一六）
同……（三四〇）
『遊ばらん』の連句……（一四四）
『遊ぶ人』の附句……（一一六）
朝がれたる……（四一）

花あやめ……（一三）
花曇り……（一一）
花咲て七日……（一三）
同の連句……（一六四）
花咲かば……（六）
花ざかり山は……（二）
花と賞と……（一三）
同……（四一）
花に明るなげき……（一）
花に遊ぶ……（一六）
同の連句……（一六六）
花にいやよ……（六）
花にうき世……（五）
同……（四一九）
同の連句……（一三六）
花に俳へり……（六）
花に来て……（四六）
花に寝る……（四五）
花の陰高に……（三）
花の陰祀に……（一六）
花の顔にはれうて……（一）
花の雲……（一一）
『花の咲く』の連句……（一四五）
花の山二町……（六）
花咲すゝき』の附句……（一三）
蕪蔓や……（一一）
同……（一一四）
泊舟よ……（七）
埴猿越す……（九）
同……（三一四）
同の連句……（一六一）
芭蕉植えて……（四）
芭蕉野分して……（四）
同……（三六六）
『芭蕉野分その句』の連句……（一四六）
芭蕉葉を……（四一）
『馬上』の附句……（三一四）
『蓮池の中に』の連句……（一六六）
蓮池や……（五〇）
蓮の香に……（一一）
蓮には……（一〇）
同……（三一六）
鳥うつ音や……（三）
鉢たゝきの歌(泥)……（三六〇）
初秋や治も……（三）
同の連句……（一六）
初秋やたゝみ……（一一）
はつ風吹けども……（同）
初午に貧の……（四一）
八九回発で……（四一）
同の連句……（一一四）
初櫻折しも……（一〇）
八朝や天の……（九）
はつ時雨鐘も……（一一）
同……（四三九）
初時雨初の字……（一一）
初霜や菊冷……（一五）
初年やまだ……（四一）
同の連句……（一六〇）
初花にいのち……（六）
初鰹祭……（一一）
初雪に兎の……（一一）
同……（四三九）
同……（五四一）
『初雪のうとし』の連句……（一四六）
はつ雪やいつ……（一一）
初雪や掛け……（四一）
初雪や芋小俵……（一四）
初雪や……（一五）
初雪や水仙……（同）

花見にとぎす……（四五）
花みな枯れて……（四）
花ネ椎はだか……（三）
花は腰の……（二）
花を吸ふ……（一六）
花を宿に……（二）
葉にそむく……（三五）
破風口に……（一五）
同の連句……（一六六）
蛤にけふは……（一三五）
同……（四六六）
蛤のいける……（四二）
同……（五九九）
蛤の口しめて……（一五）
蛤のふたみに……（三一）
同……（三六六）
同……（四三六）
蛤もいける……（四一）
はやく咬け……（三一）
同の連句……（一三一）
『はや舟』の附句……（一三一）
原中や……（一六）
峡立や……（三）
張りぬきの……（七）
『春うれし』の連句……（一三七）
春風に吹出し……（一）
春風や堺……（一五）
春風や　……（一三）
『春風や夢の中』の連句……（一三一）
『春陰にとべ』の連句……（一三〇）
春立て……（一九）
同……（一五五）
春立つや……（一九）
同……（五四六）
春なれや……（一二）
同……（一六六）
春の夜や……（一二）
同……（一六六）
春の夜は櫻に……（一五）
春雨の木下……（一三）
同……（一三七）
春雨や蛙の……（四五）
同……（一六一）
春雨や三葉に……（一五）
春雨や袋……（四五）
春雨や蔓を……（一五）
春もやゝ……（四一）
春や立つまた……（四〇）
はれ物にぞはる……（四五）
はれ物に呼の……（同）
半日の雨より……（一五）
半日は蛙を……（一四）
同の連句……（一四〇）

【ひ】

びいと啼く……（四七）
同……（四六六）
『引捨て』の連句……（一三六）
蒸風を吹いて……（五）
日頃にくむ……（四〇）
『人方や』の連句……（一六四）
ひつぢ田に……（一六）
一尾銀は……（一六）
同……（一四七）
一度の江に……（四三）
同……（四五三）
人麿や……（四六）
同……（一五三）
『一泊り』の連句……（一三一）
一里は……（一三）
一時雨恋……（三）
一つ配で……（一三）
日は花に……（一一）
同……（一五七）
枝山の麦……（四）

【ふ】

風流のはじめや……（一七）
同……（一六五）
同の連句……（一〇三）
『風流のまうと』の連句……（一三六）
深川や……（一五）
『深川は』の連句……（一六四）
深草や……（一五一）
吹飛す石は……（一三）
同……（一六一）
ふぐ汁やあはら……（一五一）
ふぐ汁や鬮……（同）
同……（四七）
吹くたびに……（四九）
富士に行……（同）
富士の風や……（一五〇）
不二の山……（一五一）
富士の雪……（同）
藤の實は……（四九）
不性さや……（一五）

同……（一六六）
一家に……（一九）
同……（一六六）
ひと鶯も（家）……（一七）
同（初）……（四四）
一とせに……（四五）
同……（一五一）
人々を……（一三）
ひと日〳〵……（一七）
同……（一六九）
人も見ぬ……（四一）
人に家を……（一五）
人の氣や……（四九）
同……（四五五）
人の身の（歌）……（一六九）
ひとり尼……（四九）
『鶯ならで』の連句……（一七七）
『行春』の連句……（一四七）
『日の春』の連句……（一六一）
日の暮や……（一五）
雲雀啼く……（一五）
同……（一五〇）
雲雀より上に……（一一）
雲雀より外に……（同）
同……（一六六）
一家に……（一九）
同……（一六六）
ひと鶯も（家）……（一七）
同（初）……（四四）
一とせに……（四五）
同……（一五一）
人々を……（一三）
ひと日〳〵……（一七）
同……（一六九）
人も見ぬ……（四一）
人に家を……（一五）
人の氣や……（四九）
同……（四五五）
人の身の（歌）……（一六九）
ひとり尼……（四九）
『鶯ならで』の連句……（一七七）
『行春』の連句……（一四七）
『日の春』の連句……（一六一）
日の暮や……（一五）
雲雀啼く……（一五）
同……（一五〇）
雲雀より上に……（一一）
雲雀より外に……（同）
同……（一六六）
一家に……（一九）
同……（一六六）
ひと鶯も（家）……（一七）
同（初）……（四四）
一とせに……（四五）
同……（一五一）
人々を……（一三）
ひと日〳〵……（一七）
同……（一六九）
人も見ぬ……（四一）
人に家を……（一五）
人の氣や……（四九）
同……（四五五）
人の身の（歌）……（一六九）
ひとり尼……（四九）
『鶯ならで』の連句……（一七七）
『行春』の連句……（一四七）
『日の春』の連句……（一六一）
日の暮や……（一五）
雲雀啼く……（一五）
同……（一五〇）
雲雀より上に……（一一）
雲雀より外に……（同）
同……（一六六）
一家に……（一九）
同……（一六六）
ひと鶯も（家）……（一七）
同（初）……（四四）
一とせに……（四五）
同……（一五一）
人々を……（一三）
ひと日〳〵……（一七）
同……（一六九）
人も見ぬ……（四一）
人に家を……（一五）
人の氣や……（四九）
同……（四五五）
人の身の（歌）……（一六九）
ひとり尼……（四九）
『鶯ならで』の連句……（一七七）
『行春』の連句……（一四七）
『日の春』の連句……（一六一）
日の暮や……（一五）
雲雀啼く……（一五）
同……（一五〇）
雲雀より上に……（一一）
雲雀より外に……（同）
同……（一六六）
一家に……（一九）
同……（一六六）
ひと鶯も（家）……（一七）
同（初）……（四四）
一とせに……（四五）
同……（一五一）
人々を……（一三）
ひと日〳〵……（一七）
同……（一六九）
人も見ぬ……（四一）
人に家を……（一五）
人の氣や……（四九）
同……（四五五）
人の身の（歌）……（一六九）
ひとり尼……（四九）
『鶯ならで』の連句……（一七七）
『行春』の連句……（一四七）
『日の春』の連句……（一六一）
日の暮や……（一五）
雲雀啼く……（一五）
同……（一五〇）
雲雀より上に……（一一）
雲雀より外に……（同）

同……（四〇）
二股に……（一三）
二人見し……（一五）
二日にも……（一九）
同……（三六）
同……（四八）
舟あしも……（一三）
文月や六日も……（一九）
同……（六六）
同……（六九）
同の連句……（一一三）
文ならぬいろは……（七）
ふもとより（歌）……（六〇）
冬枯や世は……（一四）
冬籠りまた……（一五）
『冬ごし籠る』の俳……（六七）
冬知らぬ花や……（一四）
同……（四一）
冬庭や月も……（一三）
『冬のきぬた』の俳句……（一四）
冬の日や……（一八）
同……（三四）
冬牡丹……（一一）
同……（六九）

【ほ】

ほとゝぎす正月は……（五）
ほね梁や……（四）
ほう〳〵と山吹……（一一）
同……（三七）
金過ぎて青園……（三七）

【ま】

前髪もまだ……（四八）
また絡む蛭夜の……（一五）
馬草負ふ人を……（一六）
同の連句……（一〇一）
またぬのに茶賣……（五一）

降らずとも……（四九）
ふり賣の雁……（四四）
同の連句……（一六一）
古池や……（一四）
同の連句……（一六四）
降音や耳も……（一）
古川にとびて……（三五）
古巣や……（一一）
古里の梅や……（五）
ふる里や……（一八）
同……（三四）
同……（四六）
古墨たゞ……（三一）
古寺の鐘に……（一六）
古歌や……（一四）
分別の……（四四）

【く】

蛇くふと……（三一）
同……（三四〇）
『胡蝶』の連句……（一四一）
蝉鳴は夏も……（一五）
同……（四三）
先づ配く……（三一）
千貫で分別……（四七）
同……（四七）
同の連句……（一〇六）
先づ知るや……（三）
先づたのむ……（三四）
同……（四一〇）
またたびひ……（一三）
またもとく……（一六）
待ちかねて……（四一）
『松風に』の連句……（一〇六）
松風の落葉か……（一〇）
松風の新を……（四八）
松島や雲を……（九）
松島や水を……（一七）
松茸やかぶれた……（四三）
松茸やしらぬ……（同）
同の連句……（三三）
『松茸や都に』の連句……（同）
『松杉に』の連句……（一一四）
松杉を……（四六）
松なれや鶴……（七）
待花や……（六）
まとふとな夫……（四八）

【む】

『御ちかしの』の連句……（一四八）
三井寺の門……（一六）
見えぬはやな……（一六）
見送りの……（三九）
同の連句……（一三〇）
三日月に……（四一）
三日月の地は……（同）
三日月や朝顔の……（四）
三日月や地は……（四一）
三日月やはや……（三）
無夜や……（一六）
見しやその……（四四）
見し夢に（歌）……（三九）
『武蔵野』の俳句……（一一四）
水鳥なくて……（三一）
同……（四六）
湖や……（一六）
『水音や』の連句……（一三六）

【め】

雲灯は……（一八）
蓑笠に……（四四）
同……（四七）
眺今の中や……（九）
『眺今竹』の連句……（一一四）
眺蓋の……（一八）
同……（三四）
同の連句……（一三六）
『蓑提』の俳句……（一一三）
ほたる見や……（三）
同……（四一）
牡丹蕊深く……（一四）
同……（三四〇）
牡丹蕊を深く……（一四）
同の連句……（一三七）
蚊句なり……（三）
ほとゝぎすいまだ……（六）
郭公らしみの……（一六）
子規大竹藪……（三六）
同……（三七）
子規大竹原を……（三六）
時鳥消え行く……（一一）

水清くなつて……（四七）
『水鳥よ』の連句……（三六七）
水寒く……（四〇）
水取や……（一二）
同……（三六九）
水の奥……（二九）
同の連句……（二〇七）
水向てあと……（五〇）
『見せばやな』の連句……（八七）
三十日月なし……（一〇）
同……（三六七）
道のべの……（一〇）
同……（三六七）
道細し……（四六）
見所のあれや……（三八）
皆拜め……（二五）
同の連句……（一九八）
水無月やから鮭……（二九）
水無月や鯛は……（四一）
水無月は……（三七）
みな人の（歌）……（三六〇）
身にしみて……（二四）
同……（三八一）
峯入や一里……（二三）
『蓑笠』の附句……（二三）
蓑虫の……（一七）
蓑虫や……（三二）
都出て……（四〇）
『都出てけふ』の附句……（九八）
『宮司』の附句……（二五四）
宮人よ……（一九）
『宮守』の附句……（二五四）
女夫鹿や……（二）
同……（三三五）
見る影や……（七）
見るに我も……（二）
見るまゝに（歌）……（三五九）
見ればかつ（歌）……（同）
見渡せば詠れば……（三）
同の連句……（二二五）
見渡せば花……（六）

【む】

むかし聞け……（三八）
同……（四四七）
『向ひの人』の附句……（三二五）
麥の穂や涙に……（三七）
同……（三五九）
麥の穂をたよりに……（四五五）
麥の穂をちからに……（同）
麥の穂を涙に……（三七）
麥はえて……（一八）
同の連句……（一七）
麥めしにやつるゝ……（三五）
蒔さへ……（二五）
武蔵野の……（四）
武蔵野や一寸……（二）
武蔵野やさはる……（五二）
むざんやな……（二九）
同……（三九四）
むすぶより……（二六）
同……（四三七）
むら雨を……（一八）
村時雨……（七）

【め】

名月に籠の……（四七）
同……（五四六）
名月の出るや……（三）
明月の出るや……（同）
名月の花かと……（四七）
同……（五四四）
名月の見處……（三〇）
名月の夜や……（七）
名月は二つ……（五二）
名月や池を……（一七）
同……（三六一）
名月や海に……（二八）
同……（五五二）
名月や坐に……（二八）
同……（五五二）
『名月や篠吹』の連句……（二七九）
名月や兒達……（二八）
同……（五五二）
名月や鶏脛……（五〇）
名月や西にも……（四一）
名月や北國……（三〇）
同……（三九六）
名月や門に……（四一）
名月やわが家へ……（二八）
名月や我と……（五二）
飯あふぐ蟬……（三七）
『めづらしや落葉』の連句……（一七五）
めづらしや山を……（二八）
同の連句……（二二）
『芽出しより』の連句……（二四四）
めでたき人の……（一四）
目にかゝる時や……（四五）
目にかゝる雲や……（四七）

【も】

餅花やかざしに……（八）
餅花を……（五二）
餅を夢に……（九）
藻にすだく……（九）
ものいへば唇……（三七）
同……（四一七）
同……（五六七）
物書て扇……（三〇）
同……（三九五）
同の連句……（二二）
ものずきや……（四三）
『物の名も』の連句……（一一〇）
物の名を……（一〇）
同……（三七五）
名月や門に……（四四）
名月やわが家へ……（二八）
名月や我と……（五二）
飯あふぐ蟬……（三七）
『めづらしや落葉』の連句……（一七五）
めづらしや山を……（二八）
同の連句……（二二）
『芽出しより』の連句……（二四四）
めでたき人の……（一四）
目にかゝる時や……（四五）
目にかゝる雲や……（四七）

【や】

餅花やかざしに……（八）
餅花を……（五二）
餅を夢に……（九）
藻にすだく……（九）
ものいへば唇……（三七）
同……（四一七）
同……（五六七）
物書て扇……（三〇）
同……（三九五）
同の連句……（二二）
ものずきや……（四三）
『物の名も』の連句……（一一〇）
物の名を……（一〇）
同……（三七五）
武士の大根……（四四）
同の連句……（二八九）
もの一つ……（一〇）
同……（四〇四）
『物一つい〳〵ば』の附句……（三二六）
物ほしや……（四五）
同……（四五七）
百年のけしきを……（三九）
同……（四四八）
桃の木のその葉……（三〇）
『もらぬほど』の連句……（二五二）
もろき人に……（三五）
唐土の俳諧……（九）
もろ〳〵の心……（一〇）
門に入れば……（三〇）
やがて死ぬ……（三三）
同……（五一九）
『焼食や』の連句……（一七七）
藥園に……（三九）
同の連句……（二二五）
藥鑑に……（三九）
藥欄に……（同）
やす〳〵と……（三八）
同……（四一六）
同……（同）
同の連句……（三五一）
痩せながら……（三一）
宿かして名を……（四〇）

夕暗や……（二八）
同……（四四六）
夕べにも朝にも……（三四）
同……（四三一）
夢うつし……（一一）
夢覚し……（三一）
同……（四三六）
『夢枕に』の連句……（一六四）
夢ちるや……（一三五）
夢と夢……（一八）
夢の明ひとり……（四）
同……（四一六）
同……（四三五）
同……（四三六）
夢の竹……（一七）
夢の道……（一七）
夢の日に見の……（三一）
同……（四六六）
夢の口や……（一八）
夢の記……（四）
『夢の終』の連句……（二八四）
『夢の末は』の連句……（一六六）
夢回より……（三六）
『夢やうつる』の連句……（二六八）

【め】

『目に有て』の連句……（一三一）
世にさかる……（九）
世に匂ふ……（六）
世にふるも……（五）
世にふるは……（同）
同……（四三一）
『世のうらみ』の附句……（三四四）
世の中は稲刈……（一七）
世の中はさらに……（五）
世の夏や……（一七）
世の人の……（一七）
同……（三六五）
四方にうつ……（五）
よるとしの（歌）……（三六九）
夜嵐に……（七）
よるべをいつ……（同）
世を旅に……（四六）
同……（四四五）

【ら】

蘭の香や……（一一）
同……（三六七）
同……（三四三）

『山は半蔵』の附句……（三四四）
山吹の露……（四）
山吹や宇治の……（六六）
山吹や茶に……（四）
山も海も……（一七）
山も笠も……（四）
闇の夜や……（六六）
闇の夜を……（七）
病雁の……（二六）
同……（四六三）
『やはらかに』の連句……（二六四）

【ゆ】

ゆく秋や……（一三）
ゆく歳や……（三）
ゆく春や……（一四）
同……（三四〇）
同……（四三一）
行末は……（五〇）
行年や薬に……（四〇）
行年や汝が……（一六）
行春や鳥啼き……（三六）
同……（三六三）
同……（四五一）
行春に和歌の……（三一）
同……（三七一）
行春を……（三六）
同……（四六六）
湯の名殘幾度……（三〇）
湯の名殘今宵は……（同）
柚の花に……（三六）
同……（四六六）
柚の花や……（三六）
同……（三九七）
雪を待つ……（一八）
行秋の……（四一）
行秋や手を……（四七）
行秋や身に……（三四）
ゆく歳や……（三）
行駒の……（一四）
同……（三七〇）
同……（四三一）
行末は……（五〇）
行年や薬に……（四〇）
行年や汝が……（一六）
行春や鳥啼き……（三六）
同……（三六三）
同……（四五一）
行春に和歌の……（三一）
同……（三七一）
行春を……（三六）
同……（四六六）
湯の名殘幾度……（三〇）
湯の名殘今宵は……（同）
柚の花に……（三六）
同……（四六六）
柚の花や……（三六）
同……（三九七）

【り】
龍宮も……（五二）
龍門の花や……（二一）
同……（三七六）
兩の手に……（四一）
同の連句……（二五七）

【る】
留主といふ……（三六）
留守に來て梅さへ……（九）
留守に來て棚……（一六）
留主の間に……（二五）

【ろ】
蠟燭に……（八）
臘梅や……（二五）
六月や……（四六）
同……（五五〇）
櫓の凝……（四）
爐開きや……（四二）

【わ】
和歌の跡……（五）
わが衣に……（一三）
同……（三六九）
我黒髪……（五一）
『わが櫻』の連句……（二四四）
我年を……（五）
若葉して……（二一）
同……（三七八）
我ためか鶯……（六）
我ために日は……（八）
わが宿は蚊の……（三三）
同……（五一九）
わが宿は四角な……（一〇）
別ればや……（同）
鶯の日……（二八）
わすれ草……（四）
同……（四二七）
同の連句……（二二七）
忘れずば……（一〇）
煩へば……（一四）
忘るなよ……（一六）
同の連句……（二二三）
わせの香や……（二九）
同……（三九四）
同……（五四七）
『綿ふきありく』の附句……（二二五）
綿弓や……（一一）
同……（三六八）
侘びてすめ……（四）
われに似な……（四六）
我も神の……（二）
『われもさびよ』の連句……（一八二）

昭和三年九月一日印刷
昭和三年九月五日第一刷發行

西鶴全集
定價四圓八拾錢

編者　沼波武夫
發行者　東京市神田區南神保町十六番地　岩波茂雄
印刷者　東京市神田區表神保町十番地　前田宗松
文成社印刷所

發行所　東京市神田區南神保町十六番地　岩波書店
電話九段(三)二一〇八番
九〇〇番
振替東京二六二四〇番

（寺島製本）

版權所有

岩波書店刊行書目

幸田露伴著	冬の日抄	定價二圓三十錢 送料書留十八錢
幸田露伴著	春の日曠野抄	定價二圓五十錢 送料書留廿七錢
太田水穂著	芭蕉俳諧の根本問題	定價二圓八十錢 送料書留廿七錢
沼波瓊音・小太郎・和阿辻部・幸田著	芭蕉俳句研究	定價二圓五十錢 送料書留十八錢
奉田信・太郎・小宮豐隆・和阿辻部著	續芭蕉俳句研究	定價二圓八十錢 送料書留廿七錢
奉田信・太郎・小宮豐隆・和阿辻部著	續々芭蕉俳句研究	定價二圓八十錢 送料書留廿七錢
勝峯晋風著	芭蕉七部集定本	定價二圓八十錢 送料書留廿七錢

岩波書店刊行書目

荻原井泉水著	奥の細道評論	定價二圓二十錢 送料書留十八錢
荻原井泉水校訂	一茶句集しだら	定價九十錢 送料六錢
東松露香校訂	一茶遺稿父の終焉日記	定價八十錢 送料四錢
井手今滋編	橘曙覽全集	定價二圓八十錢 送料書留廿七錢
藤岡作太郎著	國文學史講話	定價二圓八十錢 送料書留廿七錢
藤岡作太郎著	國文學全史(平安朝篇)	定價四圓五十錢 送料書留廿七錢
村岡典嗣著	本居宣長	定價四圓八十錢 送料書留廿七錢

45
593 1

終